

## 五、『何処にも無い場所』

0

もう家には帰りたくない。  
あそこには嫌な奴がいるから。  
この名前も嫌いだ。

だから、わたしはわたしの父親が付けてくれた名前を使っていた。

わたしがこの名を名乗ると、必ずわたしの母の役割を持つ人物はわたしを叩く。

——あなたなんて生まれてこなければ……！

そう、いつも口癖のように言った。

彼女は非合法な風俗店で働いていた。

そして、わたしを妊娠したと知れると、用なしと言わんばかりに解雇された。

代わりはいくらでもいる。

だから、あっさりと解雇された。

父親は責任を取ると言って、彼女と同棲し始めた。

だが、彼女の男遊びと酒癖の悪さに愛想を尽かし、わたしが小学一年生の秋に家を出て行った。

優しい父親だった。

アイランド系の透き通るようなブルーの瞳と金髪が特徴の人だった。

大好きだった。

父親として、

そして、異性として——

それをあいつはわたしから奪った。

だから。

わたしは、彼女を殺すことに決めた——



「……綺麗だねえ」

少年は、眼下に望む夜景を見つめ、ぽつりと呟く。

年は十四、五ほど。

薄水色の髪に、緑色の瞳。

真っ白な詰め襟を着込み、それに合わせたように白いスラックス。

少年は、塔から夜景を見下ろしていた。

この大都会新宿に似合わない、蔦の絡んだ古風な塔。

魔法使いが住んでいそうな感じさえする。

——いや、ここはまさに魔法使いの塔だった。

少年の佇む展望台には円状の幾何学図形が刻まれている。

その幾何学図形には小さく文字も彫られていた。  
少し魔術の知識がある者ならば、この幾何学図形が大がかりな魔術を使用する為の儀式に使う魔法陣で、刻まれた文字はそれを発動させるための魔術式だと判っただろう。  
だが、判ったとしてもそれだけだ。

これが、何に使用される魔法陣かは判らない。  
実に不気味な魔法陣だった。

通常、円を模した図形が多い中で、あえて半月を模した魔法陣。

西洋魔術の式と、東洋魔術の式を合わせたような、不思議な術式。

その奇妙さに、魔術に関わる者ならば鼻で笑うだろう。

だが、少年にはさほど気にした様子はない。

それどころか、自信に満ちあふれてさえている。

その魔法陣の中心に、不気味にそびえ立つオブジェ。

棘だらけの変わった十字架のようにも見えるし、牙の並ぶ巨大な化け物の口にも見える。

——それは、枷だった。

それに人を縛り付ける以外、存在意義は考えられない。

喻えるならば、邪悪な儀式を成功させるため、生け贄を捧げる血濡れた祭壇。

少年はそれに一瞥をくれ、再び視線を眼下の夜景に戻す。

「ああ、本当に綺麗だ……。実に美しい夜景——あの灯り一つ一つに、人々の絶望と欲望が混ざり合い、この夜景を生み出しているんだね……」

少年は微笑を浮かべ、呟く。

「……でもさ、これは僕の好きな景色じゃあ、ない」

眼が、細められる。

怒気に、口元が歪む。

「——だから僕は世界を編み直すんだ……。この傷だらけの汚れた世界を、ね——」

少年は無邪気に嗤った。

その言葉はやがて強い風にかき消される。

それと同時に、

少年の姿は消えていた。

残されたのは深い深い闇と純白の一枚の翼だけ——

それが、少年がいたことを示すただ一つの証だった。

1

八月。

コンクリート・ジャングルなどと揶揄される都会のビル街はとにかく暑い。

それは、ぎらぎらと照りつける憎たらしい太陽とクーラーの室外機から出る熱風、もとは鉄板焼き機として制作されたのだ、と言われても信じてしまうようなアスファルトの地面共が、がっちりと熱い友情の握手を交わし、驕り高ぶっている人間共に制裁を加えている為である。

「でーすからあく我々魔術師の巢はあく！ マジヤンズ・ネスト 市民の皆様は安全と安心を提供する善意の

団体でありましてえー！」

青年はメガホンも持たずに声を張り上げ叫んだ。新宿駅に凄まじい爆声が木霊する。歳は二十前後だろう。金髪に染め上げた髪に十字架が大きくプリントされたシャツを着込み、ブラック・ジーンズの上着を羽織っている。申し分のない美青年なのだが、一つ妙なのは彼の右目につけられた片眼鏡。それを指さし笑い通りすぎる女子高生もいる。

「ねえ、やめようよ狼<sup>ろう</sup>。わたし空腹でもうダメ……。だって三日間水だけだし……」  
青年——狼に向かって隣にいた少女がグツタリとした声を上げた。

歳は青年と同じぐらい。栗色の長髪をツインテールにし、黒い袖無しのシャツを着込み、『安心！ 安全！ 貴方<sup>あなた</sup>のお悩み解決します！』と書かれたプラカードを手に持っていた。普段は活発そうな印象だが、今は目は虚ろ<sup>うつろ</sup>でさながらゾンビが蠢<sup>うごめ</sup>いているかのように思える。

「何を言っている！ 零那<sup>れな</sup>!! その食事にとりつく為にも、こうやって仕事を探さなければならぬのだ!!」

「こんなことしないで、ハローワークに行った方が絶対仕事と食事にとりつけるわよ」  
射すような視線で狼を見つめ、少女——零那は言った。

どうやら空腹のため殺気立っているらしい。

「ハッ！ 何を言う！ この不況で簡単にメシにありつける仕事があるか!! 人生、そんなに甘くないぞ!!」

「少なくとも、こんなアホい仕事よりは安定した収入が得られるわよ……」  
そう言って、零那はグツタリと倒れてしまった。

「つたく、根性なしが！」

そんな倒れてしまった零那を狼は躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>無く足蹴<sup>あしげ</sup>にした。  
通常、小説やマンガの主人公にあるまじき行為である。

「おーお。随分と荒れてるな、狼。また仕事が見つからないのか？ ざまーしろ」  
そんな中、一人の男が狼に話しかけてきた。

黒髪をだらしなく伸ばし、それを後ろで無造作に束ねており、顎の周りには無精髭が生えている。左の頬には大きな傷があり、こんな平和な日本にいるよか、中東にでもいた方が似合いそうな男だ。

反面、悪ガキがそのまま成長したような子供っぽさがある。

「これはこれは、人のことを人と思わず、駒<sup>こま</sup>かなんかだと勘違いしている五月雨<sup>さみだれ</sup> 亮<sup>りょう</sup>  
警部補ではないですか……いいですね……収入が安定している公務員は……こんなことしなくてもいいんですからあ……」

狼は嫌みと皮肉たっぷりに亮に言った。

先ほどの言葉がよほどムカついたのだろう。

……あの程度の言葉でムカつくとは、狼もかなり子供である。

「……随分な言われようだな、オイ。まーた厄介<sup>やっかい</sup>な事件<sup>ヤマ</sup>の担当にされちまっとな。つーわけで、お前らを雇いに来たわけさ。あと、零那ちゃんを愛でに来た。どうだ？ 引き受けてくれるか？」

亮は胸ポケットから煙草の箱を取り出し、煙草を一本くわえ、ジッポで火を付ける。  
「その依頼の内容によるけどな。つーか、何か、お前、さりげに聞き捨てならねえこと

言つてた様な気がするのだが――」

「多分、お前にも有益な話だと思うぜ。風の噂によると、前回の殺人鬼の件、二重取りだったんだってな？ 異界では、ウイズダム・ウィザード封印一人につき、いくら出るんだ？」

狼の言葉を遮り、亮は言う。

「何故にそれをつ――!?」

「俺様をナメすぎだぜ、神鎌 狼。新宿で俺が把握していない情報はねえんだよ」

「よく言うぜ、殺人鬼の隠れ家、発見出来なかったクセに」

「民家に匿<sup>かくま</sup>われていたなんて、分かるわけねーだろ！ 流石に俺には盗撮&ストーカーの趣味はねえ」

「・・・どうだか。この間お前に借りたAV、盗撮モノだったような――まあ、いいぜ。話だけでも聞いてやるよ」

狼はグルグルと目を回す零那を背負うと自分の事務所に向けて歩き出していった。



魔術師<sup>マジシャン・ネスト</sup>の巢は、新宿駅からだいたい離れた下町の風情が残る場所にある、一際老朽化が進み、コンクリートが黄色く黄ばんだ二階建てのボロアパートだ。

お家賃税込み二万五千円。

都会の一等地――とはいかないまでも、都心にあつてこれだけの値段は破格だ。

これほどの価格設定は、ひとえに借りる者のいないボロアパートを管理する大家さんの苦肉の策であることが強い。

がちやり、と狼はドアノブに手を掛ける。

古い、ピッキングの対象になりそうな――というより、こんなボロアパートなんぞ、ピッキングするような酔狂な者はいない――簡易な作りのドアを開けると、狼は靴を適当に脱ぎ捨て、リビングへと真っ直ぐに進み、どっかりとソファーに腰を下ろした。

「いつも思うんだよな・・・外と中のギャップが激しすぎるってさ」

亮は呆れた顔で、周囲を見渡す。

狼の腰掛けるソファーは革張り。

その二つのソファーに挟まれるように置かれた長机は、縁や脚に意匠を凝らした天使の細工が彫られている。

下に敷いてある絨毯はペルシャ絨毯。

本物かどうか分からないが――いや、おそらく贋作<sup>フェイク</sup>だろう――レンブラントの描いたと思われる絵画も何枚か飾ってある。

しかし、端に置かれた仕事机は平凡な事務机。

その上には時代錯誤甚だしい黒電話なんぞが乗っかっている。

「ホント、意味分かんない部屋の趣味よねー」

言つて、零那はカップの載った盆を運んでくる。

先ほどとはうって変わって、元気潑刺な顔をしている。

おそらく、ここに来る途中に亮に買ってもらった大量のメロンパンの効果だろう。

「カップだってウエンジ・ウッドだしな」

亮は腰掛け、零那から淡いタッチで植物の描かれたカップを受け取った。

「そのカップは俺の趣味じゃねえぞ。零那のだよ。俺はピーター・ラビットが趣味でな。あー一応言っておくが、ウオーター・シップダウンのうさぎたちは好きじゃない。なんか、絵が濃すぎる。つーか、この家の家具は大半が異界でもらったモンだから、別に成金趣味とかじゃねえぞ。レンブラントは趣味だが」

狼は、色鉛筆で描かれたような淡いうさぎの絵柄のついたカップを受け取る。

「だろうな。ちなみに俺はミレーかな。種蒔く人なんかもいいけど、落ち葉拾いが一番いい。しかし零那ちゃん、ウエンジ・ウッドとは、やっぱり女の子だよなく可愛いねえ。これで、ティーパックじゃなきゃ、もったいいんだけど」

「ぜーたく言うな。つーか、それは落ち葉拾いじゃなくて、落ち穂拾いだろ」

狼は言いながら、カップの湯でティーパックを游がせる。

実際、哀しい作業だ。

これで、紛いなりにもダージリン（メーカー不明）でなければ、余計虚しくなっていただろう。

「それよりお前さ、何であの趣味の悪い革ジャン羽織るの止めたんだ？ やっぱ、羞恥心とかそういう人並みの感情芽生えたのか？」

亮は意地悪そうに笑いながら言う。

「そこら辺はどっかの殺人鬼にでも聞いてくれ。まったく、気に入ってたのによ」

狼は心底嫌そうに言いながら、まだ薄い紅茶をすすする。

「で、何なんだ？ 用件早く言えよ」

「最近、この辺りで神隠し事件が横行してるの知ってるか？」

「ああ。新聞で騒いでるやつな。まあ、八月だし、その手の怪奇事件の一つや二つどうってことないだろ？」

「どうってことなかったら、お前の所なんぞ来ねえよ。正直言うとな、今年の四月頃から行方不明者の搜索願は来ていたんだよ。だけど、別々に捜査してたわけ。それが先月の下旬頃から、ちよっとおかしいんじゃないか、ってことになってさ。でも、そんなときもマスコミに悟られないように色々手廻して頑張ってたわけよ」

「でも、悟られちゃったってこと？」

「そういうこと。さすがは零那ちゃん。ナイスな名探偵ぶりだね」

「あ、いや、迷探偵はどっかの馬鹿で間に合ってるから、その称号はよして。それより、何なの？ そのおかしな共通点って奴」

「ああ、共通点な。まず、失踪した人間の年齢が十代」

「それぐらいなら、共通点にはならんよ。この新宿じゃ、んなガキ結構いるし」

「黙って聞けよ、狼。それぐらい俺だって分かっている。肝心なのは二番目なんだ。つーか、これが共通点。目敏い週刊誌なんかじゃ、もう書かれてるぜ」

亮は煙草を口にくわえ、ジッポで火を付ける。

「その失踪事件の前日とか前々日にいなくなったやつらが、妙なこと言ってたらしいんだ」

「何て言ったんだ？」

「天使に会ったんだとさ」

「へー」

「………それだけかよ」

亮は呆れたように煙草をくわえた口を器用に歪める。

狼の反応がよほど気に入らなかったらしい。

「それ以外に何て言えばいいんだよ？ 今時天使だと？ そういうのは協会だけにしてくれ」

「協会？」

「んーなんつーか、魔術師の学校兼研究機関＋戦闘集団みたいなところだな。『仕事』の時は深緑色の衣服を身につけているイカれた連中だ。俺も直接連中に会ったことがないから知らないが、ある程度の実力を持つ奴は、天使の名をコードネームとして使えるらしい」

「へー。魔法学校か。ホグワーツみたいなものだ。だがよ、そいつら人間の姿なんだろう？」

「え？ ああ、能力は人外だがな。羽根とか輪っかとか、んなもんは付いてないぜ」

「俺が聞いた噂じゃ、そいつが会ったのは純白の羽根生やしたガキらしいんだ」

「そいつが会った？ 『そいつ』って誰だよ？」

「いやさ、今回の仕事は俺の私事も含まれていてな。姪からの頼みで、その失踪者の中の一人を捜してんだ。それで、そいつが失踪直前に、姪に天使に会って自分は彼の助けをするってなことを言ったんだそうだ」

「へー。お前に姪が……」

「そっちなかよ」

「いかがわしいことしてんじゃねえのか？」

「へっ、流石の俺でも近親相姦やるほど鬼畜じゃねえ。義理の妹とかなら別だが」

「よし。今から俺と一緒に警察行こう」

「オイコラ！ 俺、まだ何にもやってねえよ」

「いやさ、最近法律が改正されてな。危険思想を持つだけで逮捕できるようになったんだ」

「んなアブねえ改正するわきゃやねえだろ！ 思想良心の自由に反する！」

「お前だけは例外だ。この犯罪予備軍」

「へっ、よく言うぜ。この女つたらし。聞いたぜ、この間——」

「何？ 狼、またなんかやらかしたの？」

「聞いてくれよ、零那ちゃん。こいつこの間、六本木のキャバクラでさ——」

「あー言うな！ 言うんじゃねえ！ 言ったら、マジでぶっ殺す！ いや、ブチ戮る！ つーか何で知ってんだよ。あん時、俺一人だったんだぞ！」

「へっへっへ。俺の情報網を甘く見るなよ神鎌 狼。これに懲りたら、他の女に手え出さず、零那ちゃんを大切にすることだな。それが、純愛ってヤツだ」

「お前に純愛なんつー言葉、使われたくねえ」

「俺は一途なんだよ」

「どうだか。ギャルゲーの女の子、取っ替え引っ替え遊んでるし」

「そうしないと、イベントCG埋まらないからさ。ちなみに俺の純愛は千紗ちゃんに捧げているぜ」

「誰だよ!？」

「はっはっは。知りたいか？ ん？ ん？ しかし、知ってしまったら、お前もこちら側の人間になるってことだ。それでもいいかい？」

「うるせえ!! テメエみたいな変態の仲間に誰になるってんだ!!」

「ふっ! 最初はみんなそういうのさ。だが、段々と足場を崩され、最後は奈落の底に真つ逆さま。ってゆーか、お前だって俺の貸したギャルゲーやってんじゃん。仲間だよ仲間。さっきのやつに関連づけるなら、同志って呼んだ方がいいんだけど」

「んだと!? なんで俺が——」

「——ろ」

「？」

「何だ？」

「——か——に——ろ」

ぼそり、ぼそりとか細い声が零那の口から紡がれる。

わなわなと、肩を震えさせながら。

いや、震えているのは肩だけではない。

この部屋の大気がガタガタ音を立てて震えているようだった。

「おい、何かちよつと——」

「げっ、目がマジだ」

狼は素早く、近くのウェンジ・ウツドのカップを仕事机に待避させ、自分もその机の中に潜り込むうと——

**いぢやいぢや囀ってんぢやねえよ、この屑鳥共!!」**

時が、停まった。

何も、聞こえない。

何も、感じない。

真つ白な、何もない世界に放り出されたようだ。

——ああ。

声って、こんなに凄いモノだったんだ——

微睡む意識の中、狼はぼつりとそう思った。

2

まだ半覚醒の頭をゆっくりと起こし、——は覚醒した。

手術室にあるのような照明が眩しい。

——ここは何処だったつけ？

辺りをきよろきよろと見回す。

本当に手術室みたいだった。

心電図を筆頭に色々な計器やらが配置され、メスや注射器やらを置くトレイが、自分の寝ていたベッドの隣に置いてある。

——はて、わたしは一体何をしていたのだろうか？  
ぼんやりとしか、憶えていない。

この人達は自分のことを『完成体』だと言った。

『完成体』？

何のことだ？

「——ああ、このことか」

——は、腰より長い金色の髪を掻き上げ、小さく呟いた。

彼女の近くには、猫などの無数の小動物の遺体。

いや、遺体というのは少々おかしい。

一見すると、それは眠っているようにも取れる。

だが、死んでいた。

体は死なずとも、魂が死んでいた。

自分は、これを『奪<sup>スタイル・ソウル</sup>魂』と名付けていた。

死神の鎌のように、右手で撫でるだけで命を奪える。

これほど、簡単に命を奪えるモノを自分は知らない。

当たり前だ。

こんなモノ、人の、力じゃあ、ない。

——ところで。

自分の名前は何なんだ？

思い出せない。

いや。

——もしかしたら、思い出したくないのかもしれない。

「やあ、気がついた？」

途端、部屋のドアが開く。

入ってきたのは一人の少年。

年は自分より下だろう。

真っ白な学ランに薄水色の髪。

人間離れたその容姿は、女性でなくとも引きつける力を感じさせた。

否、彼は人間ではなかった。

天使——だった。

彼の背中には純白の羽根——

「具合はどう？ アイリーン。学者達が君のことをまた『洗礼』したらしいね。僕の考えとしてはこれ以上の『洗礼』は不要だと思うんだけど。これ以上体をいじくって壊れても困るしね。まあ、連中には後で何か言っておくとするか。・・・まったく、学者って奴らは、目の前に実験材料があると自制が効かない質なんだから。あれじゃあ、犬猫と同じだよ」

『洗礼』？



壊れる？

実験材料？

体をいじくる？

何のことだ？

分からない。

分からないことだらけ。

でも、一つだけ分かったことがあった。

アイリーン

それが、自分の名前。

なんだか、とても温かい名前。

「それじゃあ、今日はゆっくり休んで。後のことは他の十二使徒にまかせてさ」  
言って、天使は部屋を出る。

後には、アイリーンただ一人が残される。

ああ。

今日は、本当に、眠い。

「寝ます」

眩き、アイリーンは深い闇へと落ちていった。



「ねえ、止めた方がいいよ」

今時珍しい、三つ編み眼鏡の少女が言った。

別に彼女は友人でも何でも無い。

この予備校で、いつも席が隣同士だからよく話す程度の中だった。

彼女の蜜柑色のベストから察するに、おそらく聖ラスカサス学院だろう。

この新宿で、上から数えた方が早い部類に入る進学校だ。

いや、考え方によっては上位ではなく、一位。

親のコネや金など一切関係なく、自身の頭脳がのみが武器となる真正正銘の進学校。

聞くとところによれば、優秀な者は三年間無償だけでなく、研究費としていくらかもら

えるらしい。

高校、というよりは大学や研究機関のような所だ。

試験の内容も、従来の詰め込み式とは違い、自身で考えねば解けぬ問題しか出ない。

故に、本当に優秀な人間ばかり揃っているので、進学する者の大半がボローニャやサレルノ、ケンブリッジやオックスフォードなど海外の有名大学に進学する。

正直、こういった高校は日本には似合わないだろう。

実際、ここに来る者は優秀だが、少し変わったところじゃすまされない、イカれた連中が多い。

「でも、わたし決めたから」

「だけどさ、冷静に考えてみなよ、天使なんていると思う？」  
「いる」

わたしはきつぱりと断言した。

そんなわたしを少女はげんなりと見る。

「・・・まあ、普通の人間ならそういう反応をするだろう。  
だけど、逢ってしまったんだから仕方ない。」

「・・・で、もう一度会ってどうするの？」

「手助けしたい」

「世界でも救う気？」

「そう」

本当は・・・・・・違う。

本当は。

本当は――

『殺せる力・・・あげようか？』

「・・・あの時の声が、ふいにノイズ混じりで再生される。  
殺せる、

力――

「・・・止めておいた方がいいよ」

急に真面目な顔で少女は言う。

正直、予想していなかった展開だ。

病院行け、とでも言うのだろうか？

「そのまま行くと、あなたの未来、脱線するから」

レール？

何だ？ それ。

「・・・やっぱり、彼女も聖ラスカサス学院の生徒の例外にもれず変人のようだ。  
どうでもいいが、

何で彼女は予備校なんぞ、通っているのだろうか？



がちり。がちり。がちり。

・・・がち。

がちん。

「これは、また――」

針金のような髪を風になびかせ、少女は呟く。

「面白いように、壊れた歯車が回り始めたわね。さて、これからどういう風に回るのか  
しら・・・？」

「——で、亮さんは何の依頼にここに来たの？」

紅茶をすすり、すました顔で零那は尋ねる。

零那がこういう表情をするのはかなり珍しい。

それだけに、余計怖かった。

「は、話を戻すとだな、その天使って奴を手がかりに失踪者を探してほしいんだよ」

亮はまだ耳鳴りのする耳を押さえ、言う。

「依頼料は百万。今回は事が事だけに、成功報酬も百万だ。だが、手っ取り早く見つけてくれ。これ以上失踪者が増えても困る」

「俺はまだやるって言っていないぜ。正直、今回の話は降りようかとも思ってる」

狼は言いながら、ズレた片眼鏡を押し上げる。

「おいおい、俺の話がよっぽど突飛だったからか？」

「ちげーよ。その真逆だ」

「？」

「お前にいつか話しただろ？ 魔術師と未覚醒者の違い」

「魔術師には特殊な『眼』と『手』を持っていて、未覚醒者はそのどっちかしかつてないってやつか？」

「そう。それ。だけど、その話には続きがあつてな、実は『手』と『眼』の他にもう一つ特殊な器官があるんだ」

「それって——」

「そう。『翼』だ。こいつは外部から魔力を吸収し、体に取り込む器官でな、これにより体内の魔力を消費せずにすむんだ。要するに、力を無制限で利用できる」

「スーパード・サイヤ人みたいだな」

「しらねーよ、それ。まあ、無敵モードみたいなものだ。伝説上の代物で、あるかどうか魔術師連中の間でも議論になってるぐらいだからな。俺も、今回の話の天使がいつかは思っていない。ただ——」

「ただ？」

「もし、マジでそいつが『翼』を持っていた場合、俺に勝ち目はない」

「……お前でもか？」

「当たり前だろ。能力無制限で使えるなんて反則だ。そんな馬鹿げた奴に敵うわけなおだろ。奴らは人でありながら、限りなく神に近い存在なんだよ。連中のことを魔導師と呼ぶ奴もいるくらいだ」

忌々しげに言いながら、「まあ、ウィザード・オブ・スケルトン 髑髏の魔術師っていう『翼』持ってなくても魔導師に指定されてるイカれた奴もいるがな」と付け加えた。

「そっか——」

亮は、いつの間にかフィルターだけになった煙草をポケットから出した携帯灰皿の中に入れた。

「じゃあ、こういうのはどうだ？」

「あ？」

「お前はこの地球を護る孤独なヒーローだ。世界征服を企む悪の天使に立ち向かう」  
「……………何言っているんだ？」

「そういう気持ちで玉碎してくれ。なに、ヒーローってやつは最後には勝つのが定めだからな。何とかなるだろ」

「それって俺に死ねと——」

「お前以外に頼める奴、いないだろ？　こういうの」

「まあ、そりゃあ、そうだけどさ……。つか、俺の言ったこと聞いていたか？」

「それに、お前らは食費もヤバイほど困窮している」

「なあ、聞けって——」

「契約成立」

「しねえよ！　俺だって自分の命が欲しい」

大声を出し、ちらりと零那を見る。先ほどの惨劇が脳裏をかすめたためだ。

だが、当の零那は大して気にしていないようだ。

「しかし、天使ってやつが、お前の言う魔導師でないという可能性もあるわけだ」

「確かに。あれはあくまでも可能性だ」

「だったら、楽な仕事だぞ。前金と成功報酬合計二百万だ。これなら、生活費も潤い、お前の新品の革ジャンも買える」

「うーん。正直言うと、革ジャン買うと生活費が危うい気が——」

「あんな、パンク系の革ジャン、今時、デーモン閣下とその部下ぐらいしか着てないぜ」

「俺の記憶ではあのグループ解散した気が——」

「言い訳無用！　とにかく、依頼を受けてくれるのか、くれないのか？」

狼の言葉を遮り、亮は言う。

「正直、俺がこんな割のいい話を持つてくること少ないぜ」

「確かに。金的には文句ない」

「だったらさ——」

「いいじゃん、狼。受けちゃいなさいよ」

紅茶のカップを静かにソーサーに乗せ、零那が口を開く。

「お金がないのは事実なんだしさ、命がけになろうとも受けないと、マジで死ぬわよ。比喩表現なしにさ」

「ぐっ——」

狼はクシャクシャと頭を掻き、やがて口を開く。

「……………あーもう分かったよ、受けりゃいいんだろ、受ければ！」

「YES」

にんまりと笑みを浮かべ、亮は言う。

「じゃあ、書類にサインを。あと、血判」

狼は忌々しげに書類を亮に差し出す。

「へいへい」

亮は腰のホルスターからスイス製のアーミーナイフを取り出し、ブレードを展開させる。

「あー血はデメエの手首から。リストカットなんつー甘いこと言わずに、ざっくりとやってくれ」

「死んでしまえ」



ちよつとした昔話をしよう。

平安時代末期、公的記録に残されていない一つの大きな戦乱があった。

その名は降鬼戦争——

地上に住まう人間と突如出現した『鬼』による血で血を洗う泥沼化した戦乱は異界に住まう人間の調停により治められた。

その過程で、地上の人間は魔術を失った。

その過程で、沢山の犠牲者が出た。

沢山、人が死んだ。

一杯、

一杯、人が死んだ。

それこそ、陸が骨片で埋め尽くされ、海が血で鮮やかに紅く染まるぐらいに。

……元はといえば、お前達が蒔いた種だろう。

お前達の、勝手な思い上がりが生んだ事だろう。

なのに。

なのに、何でお前達は英雄面しているんだよ。

ふざけるな。

お前達の罪は、そんなに簡単に償えるものじゃあ、ないだろう。

一生背負い続ける罪深き十字架を、美化するな。

『もう、うちの家系は血が薄くなりすぎた——』

悲しそうな、父親の顔。

『せめて、せめてお前が——』

そこで、記憶が途切れる。

ここで、終わるはずだった。

この世の不条理さを呪い、怨嗟を吐きながら終わるはずだった。

……だが、終わらなかった。

物語はまだ、紡がれていた。

歯車は、まだ回り続けていた。

「お前……—の者か？」

その男は、僕に尋ねる。

「……実に面白い因果だな。もっとも、これも奴らの演出した出来事なのかもしれないが」

男は口を歪め、皮肉に満ちた笑みを浮かべる。

「……お前の力を引き出してやろう。力は、欲しくないか？」

それは——

ほしい。

誰にも阻まれぬ、力が――

「承諾した。貴様の中に眠る力を解放してやろう」

「あなたは、一体――」

僕の問いに、男は肩をすくめる。

「誰でもない。生きてすら、いない。そうだな――」

男は暫し黙考し、やがて口を開く。

「強いて言うなれば、このセカイに在る者だ」

「・・・何を為すために、在るのですか？」

「さあな。あえて言うなれば、悪あがき――この言葉が今の俺には相応しい」  
男は呟く。

左腕の無骨な鉄の義手を見つめながら――



「――話は変わるが、竹取の姫、あの男はどうしている？」

まだ、七月の上旬だというのに、セミの声がやたら五月蠅い。

「あの男？ 誰じゃ、それは」

「ああ。もう何年も前にうちに来た青年だよ。確か、あなたの紹介で来たと言っていたんだが――」

「ああ、神鎌 狼のことか。それがどうしたんじや？」

「ふむ・・・。彼は神鎌 狼というのか。いや、実に面白い人物だったよ。最初は飛び道具なんて創るつもりはさらさらなかったんだが、試しに儂の素戔鳴尊と対決させたら、みごとに勝利してな。霊体の式神を何の細工もしていない石弓で、だぞ？ 思わず笑ってしまったよ」

「まあ、奴ならやりかねんな」

「だろう？ それで、自分の思想をねじ曲げて、彼の望みを叶えてやったというわけさ」

「なるほど。しかし、何故今ここでこのような話をするのじや？」

「ああ、それなんだが――」

机の上に置いてある硯で墨を擦り、さらさらと上質な紙の上に達筆な文字で手紙を書く。

「これを、彼に届けて欲しい」

「ほう。これは――」

「面白いだろう？」

「確かに。奴ならば、これを読むや、すぐさま貴様の所に向かうだろうな」

「それこそ、鬼の形相で、な」

言って、彼は軽快に笑った。



「しかし、探すって言ったってどうやって探すんだよ？」

亮の帰った後、ソファーに横になり、不平を呟いた。

「そりゃあ、地道に探すしかないでしょう。取りあえず、わたしは大きい掲示板とかで情報を集めてみるわ」

零那はカップを洗いながらそれに応える。

「やっぱ、それしかないか・・・」

「ねえ、狼」

零那の、カップを洗う手が止まる。

「ん？」

「亮さんが言っていた『天使』ってやっぱ狼の言っていた通り——」

「ああ。十中八九間違いない『翼』を持った馬鹿だ。もともと、酔狂でどっかの衣装屋で買った天使の羽根付けてるなんて事になれば別だが」

「そんな奴いるの・・・？」

「さあな。ただ、この間海外ドラマで出てきたぜ、そんなオッサン」

「ああ、あのドン・ジョンソン主演の」

「俺としては相棒のほうが好きなんだが。まあ、そんなことは置いておいて。とにかく、その天使つてのが何者だかしんねえけど、魔術師だった場合、マジで俺に勝ち目はねえ」

「そりゃあ、そうでしょうね。能力無制限で使えるんだから」

「・・・それだけじゃねえんだけどな」

「えっ——？」

「あの『翼』ってのはな、別に体から生えてるモンじゃねえんだ。あれはな、外部の大气とかそういったモンが高濃度の魔力の干渉を受けて変化し、翼のように見えるだけなんだよ。『翼』が外部から魔力を吸収するにあたって、どう大気影響を及ぼすか、まったく分かんねえんだ」

「・・・分からないって？」

「文字通り、何にも分かんないんだ。何しろ、『翼』なんてモン、伝説的な存在でそれを記録した書物も恐ろしいほど少ない。分からないことづくめなんだよ」

言うや、狼はソファから身を起こし、自分のポケットから煙草の箱と百円ライターを取り出した。

煙草を一本くわえ、ジッポで火を付ける。

「・・・あの『翼』ってな、空、翔べないんだ。おかしいよな、『翼』なのに空翔べないなんて。本当にお笑いだよな」

自嘲気味に肩をすくめ、言う。

「ねえ、狼・・・」

「ん？」

「どうして、あなたはそんなに『翼』に詳しいの？」

「・・・」

紫煙が、ゆっくりと天井へと上る。

その紫煙をぼんやり眺め、やがて狼は口を開く。

「・・・知り合いに、聞いたから、だよ」

「ふーん。そっか」

呟き、零那はカップを洗うのを再開した。

「さしずめ、翔べない天使……ってところだな」  
狼はまだ半分以上も吸っていない煙草を自分の携帯灰皿の中でもみ消し、天井を見上げ  
呟いた。



「——さて」  
「もう、発ちますかな？」  
「ああ。これから、やつと秋葉原で待ち合わせをしているのだな」  
「彼に手紙を渡すことをくれぐれも忘れぬように」  
「分かっておる」  
「……今度はいつ頃、御名羽市に訪れますかな？」  
「さあな。何しろこちらも忙しい身での」  
「そうですか。ではまた」  
「うむ。さらばじゃ」  
言って、彼女は男から渡された手紙を携え、その場を後にした。

4

深夜。

大都会の喧噪から少し離れた薄暗い場所に人影が二つ。  
一人は小柄な少年。

もう一人はその少年より少し背の高い金髪の少女——

「OK。随分と上達したじゃないか」

少年は拍手をしながら、喪服姿の少女へと近寄る。

「……いえ、まだまだです。実際、何人かに見つかってしまいましたから」

少女は首を振り、ちらりと路上に倒れている数人の男女を一瞥する。

みな、眠ったように動かない。

だが、死んでいる。

もう、再び以前のように活動することはないだろう。

「いや、そのおかげで試験がより多くできた。物事はより良い方向に考えないと」

「はい」

「———そういえば、君が最初に殺したのは誰だったかな？」

少年は笑顔のまま、少女に尋ねる。

「わたしの生みの親です。俗に言う、母親というものです」

「どうだった？ 肉親をその手で——文字通りその『手』で殺した感想は」

「何も、感じませんでした」

「そう。何も感じなかったのかい？ 憎しみとか、後悔とか、そういうの」



「はい」

「そっか——」

少年は呟くと、「エディプスでさえ、苦悩したのにねえ」と言った。

「エディプス？」

「ああ。オイディプスとも言うね。スフィンクスの謎かけに勝った勇者さ。彼はその後、王になるんだけど、その過程で前王の后を自分の后として迎えるんだ。正義感が強い彼は前王の死因を家来に調べさせる。そこで意外な事実が判明するんだ。何だか分かるかい？」

「いえ」

「なんと、自分が殺していたのさ。彼は、数年前に酔っぱらって狼藉をはたらいていた暴漢を殺したことがあってね。その暴漢こそが王様だったんだよ。しかも、話はそれだけでは終わらない。その前王は自分の実の父親だったんだよ。しかも、今后として側に置いている女性は自分の実の母親。その衝撃の事実を知って、彼は苦悩する。当たり前さ。自分のその手で父親を殺し、あまつさえ、自分の母親と寝てしまったんだからね」

言って、少年はおかしそうに笑う。

「この話の教訓はね、みんな無意識に自分の同姓の親を憎み、異性の親に大して恋愛感情を持つてことなのさ。つまり、人間ってやつはみんなマザコンないしはファザコンなわけ」

「そうですか・・・」

「君はその傾向が実に顕著だね。母親を憎み、父親を愛するんだから。おっと、それは昔の話だったね。今の君は何も感じないんだから」

「はい」

「ところで——」

「何でしょう？」

「今の君の目的は何なんだい？」

「あなたの力になることです」

「そいつはありがたいね」

少年は肩をすくめ、夜空を見上げる。

都会とはいえ、ここには光源があまりなく一つや二つの星は確認できる。

「——そういえば、誰かが言っていたな」

そんな僅かばかりの星空を見上げ、少年は呟く。

「信仰の一番の犠牲者は信者だってさ」

呟き、自分の胸に手を当てる。

「・・・もつとも、それは僕も同じか——」



『死体が出たぞ。今度のもやつば変死体だ。死んだ連中の中には失踪した奴も混じっていたんだ。神隠し事件も進展するかしんねえ』

「ほー。で、死体はどんなヤツ？」

狼は受話器を肩と頭で挟み、メモ帳を広げメモを取る。

『メモの準備出来たか？』

「おう」

『死体には外傷はおろか、内臓も綺麗なんだ。簡単に言えば死因が分からない。鑑識のじーさんも「この仕事何十年とやってきたがこんなのは初めてだ」とかって言っていたし。とにかく分からないこと尽くめなんだよ。死んだ連中、殴れば起きるような感じだ』

「外傷がない、だと？ マジかよ!？」

『何だ？ もう、何か分かったのか？』

「・・・・・・やべえ。マジでやべえ・・・・・・!」

手に握る万年筆がブルブル震えている。

『おい、狼、何なんだよ!？』

「死体、いつ死んだか分かるか？ あと、どこにいる!？」

『はあ？ えーとだな、脳が活動停止して心停止たのが今日の深夜二時頃だな。今は署内にいる。昼飯真つ最中。カップ麺が哀愁をそそる。零那ちゃんの手料理食いてえよ』

「よかった・・・・」

『・・・・・・？ 何がだ？説明してくれよ』

てつきり、狼に冷酷に突っ込まれると思ったが、この意外な反応に亮は戸惑う。

「いいか、それ殺<sup>や</sup>った奴は完全に『こちら側』の人間だ」

『やっぱりな』

「そして、その中でもかなりヤバイ部類に入る能力だ」

『ん？ 何だよ、それ』

『奪<sup>ドレイ</sup>取、一般にそう言われている力だな、文字通り対象者の魂を抜き取るんだ』

『あーそれ知ってる。ゲームとかで与えたダメージ分自分のHP回復するやつだ』

「HP回復するかどうかは知らねえが、そいつの攻撃を受けたら最後、絶対死ぬ。間違いない。だからもうその場に近付くな。ってゆーか、そいつに出会うな」

『大丈夫だって。そんな宝くじ当たるような確立の出来事、起きやしねえって』

「そうだといいんだけどな――」

『おう。まあいいや。そろそろ三分経つから切るわ。俺、伸びた麺類って嫌いなんだよ。特にラーメンは最悪だ。だから俺は出前を取らずこうやってカップ麺をだな――』

「あつそうかよ。じゃあな」

言って、狼は受話器を本体に戻す。

「マジでやべえことになったな・・・・」

狼は呟くと、メモ帳を見やる。

メモ帳にはただ一言、

マジ

と、震える文字で書かれていた。



阪下 景一<sup>さかした けいいち</sup>は走っていた。

もう、いつから走っているか分からない。  
とにかく、走って、走っていた。

一刻でも早く、遠くに行きたかった。  
連中のいない、どこか遠くへ――

あの力、

――アレは、人の力なんかじゃあ、ない。

何が、『洗礼』だ。

何が、『使徒』だ。

何が、『新世界』だ。

狂ってる。

狂って、やがる………！！

確かに、俺は望んださ。

力が欲しいって望んださ。

……俺の家族は最悪だった。

親父は定職にも就かず、しょっちゅう飲んだくれて、ギャンブルで借金しこたま拵えやがる。

母親はそんな糞野郎に媚び諂い、体を壊しながらもパートで生計を立てる。

姉貴はどうしようもない淫乱で、顔が良ければ誰とでもやりやがる。

そんな、絵に描いたような駄目家族だった。

どうしようもない、屑家族だった。

だから。

だから、俺は小さい頃から力ってヤツに執着していた。

誰にも負けない、誰も俺に逆らえない、そんなスゲェ力を――

力以外には何も信じられない。

沢山喧嘩もやった。

地元で有力な不良グループとも何度も戦った。

止めに入った教師も血祭りに上げた。

力が手に入るんだったら、何でもやる。

あの天使の誘いはまさに渡りに船だった。

奴に言われるがまま、俺は奴についていった。

でも。

でも、俺は知ってしまった。

力ってヤツは強ければ強いほど、代償がデカイって当たり前のことを。

昨日知り合った奴が、今日はいない。

近くの奴にその理由を聞いてみると、皆口を揃えて言う。

『洗礼』に失敗したんだよ

――って

.....

その時、俺は恐怖した。

自分も、いつかはこうなるんじゃないか、って――

だから、俺は逃げ出した。

あそこから、逃げ出した。

俺は実験動物じゃねえ。

人間なんだ。

人間なんだ。

人間なんだ。

――まだ。

遅かれ早かれ、連中は俺を追ってくるだろう。

予想される結末は二つ。

処分されるか、

またあそこに連れ戻されるか――

前者ならまだいい。

そこで、終われるから。

だが、後者なら――

あいつら。

あいつらだって、最初は普通だったんだ。

喜んで、

怒って、

哀しんで、

楽しんで、

でも。

どんどん、狂っていった。

喜ばなくなった。

怒らなくなった。

哀しまなくなった。

楽しまなくなった。

ただ、無機質に天使の命令を聞く人形になった。

人形。

どんなに人間に近づけても、決して人間になれぬ存在。

無機質な、

冷たい、

哀しい存在――

やだ。

俺はそんなモノになりたくない。

確かに力はほしい。

でも、俺は人間でいたいんだよ。

喜んで、

怒って、  
哀しんで、  
楽しんで、

——そういう、人間でいたいんだよ。

……くそう。

足が、疲れてきた。

そういえば、ずっとさっきから走っているもんな。

もう、ここまで来れば連中も追って来まい。

少しぐらい休んでも——

風が、唸る。

じやらりと、鎖の音を孕ませながら——

あ————れ……？

俺、立ってたはずなのに——

なんで、俺自分の体、見られるんだ……？

ああ、そうか。

首、斬り落とされたからか——



「……まったく。物語に何も関係ない奴が出しゃばってくるんじゃないよ。悲しい身内話でお涙頂戴ってわけ？ 馬鹿も休み休みやってくれよ。そんなところで、共感誘ったり、感動の押し売りする奴は馬鹿な作家ぐらいなものさ」

純白の少年は血溜まりに沈む少年に一瞥をくれ、嘆息混じりに呟いた。

「しかし、流石だね。異界での称号、黒煙を纏いし番犬は伊達じゃない」

「当たり前だ」

ぶん、と血糊を払い、男は刀を鞘にしまった。

奇妙な刀だった。

一見すれば日本刀のそれだったが、よく見れば日本刀とは似ても似つかない。

柄が西洋の両手剣に酷似し、

刃の部分が、両刃になっている。

まるで、西洋の刀匠が形だけ見て遊びで創ったようなその奇妙な刀の柄からは鎖が伸びており、その鎖が男の右手の枷に連結されている。

「それより我が主、このような場所にあなたがいるべきじゃない」

男は汗ばんだ銀髪を掻き上げ、少年に言う。

「そうかい？ たまに、部下の仕事を見るのがいい上司だと思うんだけど」

「そうですか。ならばお好きに。それより、死体はどうします？」

「放っておこう」

少年は笑いながら、言った。

「そのほうが面白い」

「御意」

眩き、男は風を唸らせ姿を消す。

「まったく――」

男の消えた場所を一瞥し、少年は呟く。

「どうして僕の周りにはああいいう無愛想な人間が多いんだろうねえ」

5

「狼、何かあったの？」

買い物から帰ってきた零那が狼に尋ねる。

「亮から電話」

「へー。どんなこと？」

さほど興味がないのか、がさごそとビニール袋を漁り、中からスイカの形をしたアイスバーを取り出し、封を切って口にくわえる。

「どうやら、天使は本物だ」

「やっぱ？」

「・・・リアクション薄いな」

「だって、ある程度分かったことだし」

「まあな」

狼はつまらなげに呟くと、事務机に足を乗せる。

「でもさ、どうしてそんなこと分かったわけ？」

「昨日・・・つーか、今日の深夜に殺しがあつてな。死んでいた連中の中に失踪者が含まれていたんだ。例外なく、こちら側の力によって殺されていた」

「だからって、天使が本物とは言えないでしょ。論理の飛躍ってやつじゃない」

「まあな。だが、被害者七人のうち、失踪者五人が死んでいたんだ。これは偶然か？」

「後の二人は？」

「多分、目撃者だろ」

「なるほどね」

いつの間にかスイカのアイスは食べ終わり、今度はハーゲンダッツ（グリーンティー）を食べながら頷く。

「でもさ、もし、やったのが天使なら何で失踪者を殺したわけ？ そもそも、何で天使は拉致なんかする必要があつたの？」

「これは俺の憶測だが、やったのは天使じゃねえ気がする」

「ほー。そりや何で」

「『翼』持つてる奴にしちや、能力がショボイ」

「どんなん？」

「奪取<sup>ドレイ</sup>」

「あー。ハサミギロチンとかツノドリルみたいなやつね」

「それ何？」

「一撃必殺。ただし、命中率三割みたいない！」

「パクリはやめなさい。まあ、大方当たってるな。本当に『翼』持ってる奴なら、その死体も消し炭にするだろ。だから違う」

「じゃあ、アンタはどう考えてるのよ？」

「多分、天使の同志だろうな。それが失踪した奴」

「・・・あのさ。言ってる意味がよく分からないんだけど」

「さっきお前がした質問の二つめの答え。拉致した理由。多分、同志を集めてるんじゃないのか。自分と似たような奴を、さ」

「じゃあ何でその見つけた同志を殺したのよ？」

「それは・・・その・・・考えが違ったりとか仲違いしたんじゃないの？ 知らねえよ、そこまでは」

狼はぼりぼりと頭を掻きむしり、歯切れの悪い口調で言った。

「同志集めて何するのよ？ ボランティア活動？」

「クーデター」

「は？」

「それぐらいしか思いつかねえよ。魔術使える奴揃えてすることなんてさ。世界征服なんてデカイこと無理だし。あと、カルト教団創るつてのもあるな」

「そう・・・だよね」

言って、零那はハーゲンダッツを事務机に置いた。

「ねえ、狼」

「ん？」

「子供の頃さ、見ていたアニメがあったの。今じゃ絶対に見られないような馬鹿馬鹿しい内容でさ。変なカッコした女の子が、やつぱり変なカッコした杖を持って色んな人達と関わっていくの。要するに、魔女っ子ってやつなんだけどね。そこでさ、「魔法は人を幸せにするモノなんだ」って台詞があったのよ。わたしさ、それ、ずっと信じてたの。でもさ、父親に魔術を習ったとき、それが崩れた。多分、魔術ってやつは幸せってモノから一番遠いものなんだって」

「・・・ああ。魔術は今のところ、人を殺す手段だからな」

狼は手を頭の後ろで組み、言った。

「でもさ、それ以外のことも出来る。俺はそう思ってるよ。ナイフと同じだ。人を切ったり刺し殺したりも出来るが、果物を剥くことも出来る。だからさ、いつかきつと、人を幸せにすることも出来るんじゃないか」

「出来るかな」

「知らねえよ」

狼は嘆息混じりに言った。

「だが――」

「何？」

「変だよな」

「そりゃあ、『こちら側』で変じゃない事件なんてないでしょう」

「ちげーよ。俺が言ってるのは、何でもそんなに力持った奴がいるんだってことだ。俺の

推測が正しければ、少なくとも三人以上の未覚醒者<sup>ウイズダム・ウイザード</sup>ないし魔術師が天使の側にいる。そんなに何でいるんだ？」

「前に狼の言っていた『異変』ってやつなんじゃない？ 未覚醒者<sup>ウイズダム・ウイザード</sup>は『殺してやる』とか『生き延びたい』とかっていう極度の感情の高ぶりから覚醒するんでしょ？」

「お前さ、いくらこの日本が病んでいるからって、そんな状態まで追いつめられるシュチュエーションがどれだけあると思ってるんだよ？ それこそ、生と死の境まで追いつめられた奴らが覚醒するんだ。そんな沢山いるわけねえよ」

「じゃあ、魔術師は？ わたしの家のような『古き血』だっているんだから——」

「あんな、日本の人口の何%が『古き血』だと思ってるんだ？ 1%もないんだぜ」  
「まあ、そうだけどき。偶然ってことも——」

「出来すぎた偶然は必然。これ、常識だぜ。もつとも——」

呟き、狼はポケットから煙草の箱と百円ライターを取り出した。  
箱の中を見るともう数本しか残っていない。

・・・吸い過ぎだな。

肺ガンになっただろうだろうか。

しかし、どっかの誰かじゃないが、吸わなきゃやってられない。

煙草を一本くわえ、百円ライターで火を付ける。

紫煙が、ゆらゆらと揺れながら天井へと上る。

「これが物語ならなおさらだ」

「何、それ？」

「昔さ、師匠が言ってたんだよ。『この世界は本であり、紡がれるべき物語であって、我々は物語の登場人物にしかすぎない』ってな」

「ふーん」

「・・・マジで食うこと以外興味ないんだな・・・」

狼はげんなりと呟き、椅子を立った。

「マジで大変なことになりそうだ」

「いまさらでしょ」

「だよなー」

狼は吸いかけの煙草を携帯灰皿の中でもみ消し、言った。



篠島<sup>しのじま</sup> 積木<sup>つみき</sup>は書類の山を見てげんなりとため息を吐いた。

小さい頃、刑事ドラマが好きだった。

リボルバーをかまえ、不敵に笑い、カッコイイ決めゼリフを吐いて犯人を逮捕する。  
そんな人間になりたかった。

だが。

だが、現実——

「大半がデスクワークなんだよな・・・」

しかも、銃は許可がないと使えないし。



「それにしても、さ——」

椅子にとっかりと座り、書類の一枚を取る。

「最近多すぎなんだよ、こういう事件」

積木の見ている書類は、昨日の深夜に起こった殺人事件の関係書類だった。

練馬区で、日本刀のような刃物で首を切断された死体が発見されたらしい。

これだけじゃない。

最近、殺人事件はこんな猟奇殺人ばかりだ。

おかしい。

おかしすぎるのだ。

殺人事件は前からあった。

動機は強盗から私情の縄合いまで、何でも御座れだ。

けれど。

その中で猟奇殺人は1%にも満たなかった。

一年に一回起きるか起きないかぐらい。

それが、

今年に入ってから数十件。

正直、昨日起こった事件なんて一番マシな方だ。

だって、凶器が分かっているのだから。

六月には新宿の雑居ビルが丸ごと消えた。

ガス爆発というのが、関係者の見解だったが、自分はそうは思わない。

何故なら、そのビル一戸が丸ごと消えただけで周囲の他のビルは何の被害も被らなかったからだ。

通常のガス爆発ならそうはいかない。

「よう」

にゅっと突然、むさ苦しい顔が自分の眼前に現れる。

年は三十ほど。

だらしなく伸ばした黒髪を後ろで乱雑に束ね、顎にはむさ苦しい無精ヒゲ。

左の頬には大きな傷。

こんなところで刑事なんかやっていないで、中東かどつかで傭兵をやっていた方が似合

いそうな男である。

事実、昔は傭兵だったなんていう馬鹿馬鹿しい噂も流れているぐらいだ。

彼の名は五月雨 亮。

階級は警部補。

警視庁の中で一番の問題児で、それと同じぐらい一番の敏腕警部補であった。

「あ、先輩。どうもっす」

「相変わらず、書類整理か。大変だねえ」

・・・誰のせいだよ。

この中にはお前の始末書も入っているんだぞ。

「先輩はどうなんですか？ 眠そうですね」

「ああ。そりゃあな」

そりゃあ、先輩だって仕事しているんだ。  
きつと、また徹夜明けなんだろう。

この人はこの外見から分らないだろうが、かなり仕事が出来る人だ。  
平気で一週間ぐらい徹夜をやつてのける。

この人が担当している、神隠し事件はまだ片づいていない。  
それ故、きつと寝られない日々を過ごしているのだろう。

「大変ですね」

「当たり前だ」

煙草をくわえ、慣れた手つきでジッポの蓋を開け火を付ける。

「何しろ、散々だったからな」

「進展したんですね？」

「あー。大変だったけどな」

先輩は器用に煙草をくわえたまま欠伸をかみ殺し、言った。

「で、どこら辺が大変だったんですか？」

「そりゃあ、顔作りだよ。あれは苦勞した」

顔作り？

モンタージュのことだろうか。

まさか！

もう犯人が分かったということなのだろうか!!

すごい！

すごいよ、五月雨先輩!!

僕はあなたを誤解していた！

ただのオタでロリで社会不適合者だと思っていたけど、やっぱりやるるときやるんだ！

「あと、体もな。服とかで見えない所も丁寧に創らないと、完成したとき変になるんだ

よ」

体？

体格まで分かったということか！

じゃあ、もう指名手配か！

しかし、完成？

何が？

「あと、今回は塗装もこだわったんだよ。エアブラシでこう皺の部分の影とかをな。い  
つとも手抜いて後が悲惨だったから、今度はそれも神経注いだんだ」

え・・・？

あの・・・？

エアブラシ？

あの、プラモの？

モンタージュにそんなの必要だったか・・・？

「あの・・・それって――」

「ああ。オリジナルフィギュアだ。最近、ガレキに飽きてきてな、自分で一から創ろう  
と思って仕事の合間にこつこつ創っていたんだ。どうだ？」

言って、先輩は僕にフィギュアをずいといと見せる。  
前言撤回。

やっぱり、先輩はオタでロリで社会不適合者だった。  
それなのに、何で敏腕なんだよ。  
理不尽じゃないか！

「結構いい出来だろ？」

ああ。

ああああああ。

痛いよ、痛々しいよ。

色んな意味で。

しかも、出来がいいのがかなり悔しい。

つか、何でネコミミでロリでメイドさんなんだ？

何でこういうキャラって髪の毛変な色しているんだ？

それより、何でロリなんだ？

なんで、ぺったんこなんだ？

なんで、洗濯板なんだ？

なんで、豊鯨なんだ？

やっぱり、女の子には胸がないと！

そりゃあ、自分は巨乳マニアとかじゃないけれどさ、やっぱりこう服脱いだときとか出る  
トコ出てないと萎えるつかなんつか・・・

いや、

僕はマジで巨乳好きじゃないですよ？

うん。

絶対。

でも、メイドさんかぁ・・・

「ご主人様」とかって言って迎えてくれるんだろうか・・・

彼女イナイ歴Ⅱ年齢で安月給な自分にはメイドさんはおろか女の子と話すのも、夢のま  
た夢のまた夢だけだ。

「あははは。いい出来ですね」

「お、分かるか」

分かんねえよ。

「はい。僕も小学校の頃ガンブラとか作ってましたから」

これはホント。

だけれど、作ってるのは現在進行形だったりする。

二十四にもなってもプラモ作ってるなんて恥ずかしくて言えない。

「おー。で、どれが好き？」

「そうですね。やっぱりU・CのMSが一番良いですね。イフリートとか。アナザーの  
作品はどうもだめだ。SEEDもいっちゃいいんですが、やっぱり美形ばっかつてのは  
自分には合わないですよ」

「おーおー。U・Cが好きなんて、それこそガンダムファンだ。やっぱり誰でもU・Cに

帰るってのは自然の摂理なのかねえ」

「多分そうでしょう。僕も小学生まではWやXが好きでしたから。でも、0080や0083、08とか見ちゃうと、やっぱりU・Cの方がいいと思うんですよ」

「0083か。あれはいいね」

「はい」

ああ。

何でこんな風にガンダムトクしているんだ？僕。

流されてる。

滅茶苦茶流されてる。

「じゃあさ、これからガンブラ買いに行くか？」

「ええっ!? 勤務中ですよ!!」

「気にすんな。さあ、行くぞ」

言って、先輩は僕を引つ張り出す。

ああ。

僕、こんな流されるままの人生でいいのだろうか・・・？

いいわけない。

いいわけがあるかああああ!!



「――で、先輩」

「何だ？」

「ガンブラ、買いに行くんでしたよね？」

「ああ。そーいや、そんなこと言ったっけな」

先輩は何食わぬ顔で言ってるのける。

「先輩」

「何だ？」

「ガンブラって、こういう所に売ってるんですか？」

そこは場末のバーだった。

普通、こういうところはお酒は売っていてもプラモは売っていない。

「あるかもよ」

「・・・嘘でしょ」

しかも、怖いお兄さん数人のオプション付き。

「だって、ここは密輸品や禁制品を取り扱ってるところだ。中国製のパチモンはあるかもよ」

全員、怖い顔でこつちを睨んでる。

「でも、何でこんな所に？」

「お前、刑事ドラマのファンなんだろう？」

な、何故それを!?

「は、はあ・・・」

「だったら知ってるはずだろ？情報屋って存在を」  
「・・・マジモンですか？」

「マジじゃなかったら、何なんだよ？」  
い、いやさ・・・

確かにデスクワークなんて嫌だよ。  
めんどくさい。

だからってさ、

だからって、これはないんじゃない？  
いきなり強面のお兄さんがいる闇組織の現場ってのはないんじゃない？  
「あの・・・何で僕なんて連れてきたんでしょうか・・・？」

「社会科見学」

「どうせなら、別の所がよかったです」

「そりゃあ残念だったな」

先輩は豪快に笑い飛ばす。  
いつか。

いつかきつと、

殺す。

殺してやる！

殺すからな！

絶対、殺すからな！

・・・その前に僕が殺されるかも・・・

「で、でも何でこの人達こんなに僕たちのこと睨んでいるんでしょうか」

「僕たち、じゃねえ」

先輩はそう言って、ちらりと周りを見渡す。

「俺を、睨んでいるんだ。つーか恨んでる。殺したいぐらいに」

「・・・」

帰りたい。

帰りたい。

帰りたい。

マジで、帰してください・・・！

「大丈夫だって。平気さ。俺達はビジネスに来たんだから」

ホントだよ。

「ミスタ、頼んでおいた情報は掴めたかい？」

「ああ。ここにある」

ミスタと呼ばれた男はチャイナ服を着た小柄な男だった。

あいつ、絶対日本人だ。

語尾に『アル』を付けるに違いない。

男はCD-Rを先輩に見せる。

「だが、駄目だ。お前、たしか俺の友人を一人ほどムショに送ったよな？」

邪悪な笑み。

ドラマとかで見るとような演技じゃなくて、本物の、憎たらしい笑い方。  
「そーいや、そうだったかな。でも、約束の金は積んでんだ。とつとつ、そいつをよこしやがれ」

「出来るのかよ？この人数で。お前の連れてきたヒヨッコは役に立ちそうにないぜ」  
ヒヨッコ・・・？

僕のことか？

まあ、確かにヒヨッコだろうけどさ。

でも、これでも柔道初段なんだぞ？

「別に。こいつは社会科学見学で連れてきたただけだ。戦力だなんて考えてねえよ」  
不敵に笑い、先輩はミスタを睨み付ける。

「それより、いいのかよ？ お前んところボスが許すかね？こんなことして」

「後でどうとでもなるさ。じゃあな」

「ああ。じゃあな」

一瞬。

風が、鳴った様な気がした。

いつの間にか、ミスタの額にはびつたりと銃口が突き付けられていた。

コルトパイソン、と呼ばれるリボルバー式の銃だ。

バレルが通常のよりやや長い。

八インチバレルだ。

法治国家日本で、そんなもの持っていないはずがない。

なのに、

先輩はそれを構えている。

笑いもせず、

怒りもせず、

無表情に、それを構えていた。

「言っただけだぜ？」

先輩は冷えた目つきで、ミスタQを見る。

「『じゃあな』って、さ——」

「はははは。冗談だ。冗談。ほんのジョークだよ・・・」

「そうかな？ 殺る気満々だったじゃねえか、お前」

がちり、

撃鉄が、鳴る。

「それに、俺にジョークは通用しねえんだ。憶えておけ。もつとも、もう記憶する必要もないか」

「なあ、おい——」

「あばよ」

引き金に、力が込められ——

「そこまでいいでしょう」

途端、後ろの方から声がした。

見ると、そのには一人の男。  
年は四十ぐらいだろう。

人のこと言えないが、とにかく、ぱっとしない男だった。  
髪型はスポーツ刈りより長め。

おそらく安物だろう、くたびれた紺色のスーツに身を包み、何故か可愛らしく皆さんの模様のネクタイを締めている。

茶色の革靴——いや、合成革だから合成革靴とでもいうのかな——をスリッパのようにして履いており、ご丁寧な靴下は左右違っている。

このような場所に似つかわしくない男だった。  
これなら、どこかの潰れかけた会社の窓際にいたほうがまだマシだ。

「物騒なことは止めてくださいな」  
につこりと、柔和な笑みを浮かべ、男は言う。

「……」  
先輩はその男に一瞥をくれ、肩をすくめる。

「久しいな、闇の帝王」  
亮は銃を背広の懷に銃をしまうと、皮肉に口を歪め、言った。

「その言い方は止めていただけませんか？」  
アルティメット・スライパー 究極の掃除人。僕は、ただのこの店の店主です」

「俺だって、ただの不良刑事だよ」  
闇の帝王？

アルティメット・スライパー 究極の掃除人？  
何だ、それ？

つてゆうか、もしかしてこの男、すごい人なのだろうか？  
……全然見えないけど。

「ミスタ、彼にディスクを渡してあげなさい」  
「ですがボス——」

「あなたが、友人を思う気持ちも分かりますが、ビジネスの時はそういう感情はなくしなさい。でないと、大変な目に合いますよ」

「……」  
ミスタは渋々と先輩にディスクを渡す。

「これで、いいんですね？」  
「ああ。手間、取らせたな」

先輩はディスクを受け取り、言った。  
「では、また」

「出来れば、お互い合いたくないだろうがな」  
「それは、その時々状況ですよ。僕はビジネスマンなんで」

「……それもそうだ。おい、行くぞ」  
先輩は僕の肩を叩き、店から出るように促した。

——途中、僕は後ろを振り返る。  
そこには柔和な笑みを浮かべ、手を振る闇の帝王の姿があった。

僕も、それに応え、手を挙げようとする。  
挙げようとする、が。  
彼が本当に笑っていないことに気付き、慌てて手を下ろした。



「何だったんですか、あの人」

「こちら一体を仕切ってる闇組織のボスだ。有名な広域指定暴力団なんかも、いくつか傘下に治めてるとんでもねえ組織の、な」

「そんな人の所に何で僕なんかを連れてきたんですか？」

「お前が刑事ドラマのファンだからだよ」

「ですから、何ですか？」

「お前さ、デスクワーク嫌だとか言ってただろう？」

うっ・・・

どうして知ってるんだ？

「そんでもって、心のどっかじゃシルベスタ・スターローンやドン・ジョンソンになれると思ってるようだし。更衣室のロッカーにポスター貼ってるぐらいに」

げっ・・・

あ、あとで剥がしておこう。

「アブねえんだよ、そういうの。あいつらは所詮役者だ。予定されている結果にそって動いてるだけだ。だから、あんなこと出来るんだ」

・・・分かってる。

それぐらい、知ってる。

自分が、もしあんな状況に陥ったら、何にも出来ないことぐらい知ってる。

分かってるさ。

分かってるけど、

どっかで、思ってた。

ヒーローになれると思ってた。

思ってたんだ。

「だから、現実ってのを見せてやったんだよ。お前、結局何にも出来なかっただろ？」

「——はい」

悔しい。

すごく、悔しい。

「あんま、説教臭いこと言いたくないんだけどさ、勝てる奴以外に喧嘩売るなよ？」

「勝てるも何も、僕は喧嘩なんかしたことありません」

「そっか——」

「・・・やっぱ、結構喧嘩とかしないと駄目ですかね？」

「んにや。そうは思わんよ。殴り合うのは痛いし。俺、痛いのヤなんだよ。注射とかも好きじゃないし」



「・・・そうですか」

「ま、散々偉そうに言ったけど、今回の社会科見学、実はお前を出汁に使っただけだし」  
「は？」

顎が、外れた。

何を言ってるやがりますか、この人は。

ってゆーか、シリアスな所だったんじゃないのか？ここは。

もつと、こう、感動の涙とか、そういうのがあってもいいんじゃないのか？

いきなり、ネタバラシはないだろ。

「ああやって、俺が馬鹿言ってお前を連れ出せば、あとで怒られるが、この店に行  
ったとは思わないだろ？俺一人だと、疑われるからな。お偉いさんに」

「・・・ああ。あのガンダムトークから・・・いや、その前のフィギュア見せびらかした  
ころから・・・いや、もつと以前から、僕は先輩の術中にはまってたんだ。

この人、本当に喰えない人だ。

利用されたと知っても、本気で怒れないぐらいに。

「これでお前も共犯者だ」

「酷いですね」

「おうよ。俺は酷い奴なんだよ」

言ってる、先輩は笑う。

先ほどの闇の帝王と違って、本心からの笑い。

悔しいなあ。

こんな気持ちよく笑えるなんてさ。

「で、先輩。そのディスクは何が入ってるんですか？」

「神隠し事件のネタだよ。調査してもらってる奴に渡すんだ。この中にはヒントしか  
入ってないが、奴なら大丈夫だ。名探偵みたいな奴だし、分かるだろ」

「へえ。そんな人がいるんですか」

名探偵。

これこそ、主人公って役柄だろう。

僕みたいな脇役じゃ、到底無理な役だ。

「しかし、ただ渡すだけじゃつまらない」

キラッ、と先輩の目が光る。

黒板消しを教室の扉に挟んで教師が来るのを待つような目だ。

「あの野郎がゲロ吐いてのうち回ってから失神するようなホモ画像なんかを入れてや  
る。くっくく・・・。ディスクをパソコンに入れた途端発動するんだ。回避は不能。は  
っはっは！ どうする狼！ お前が零那ちゃんと一緒なのがいけないんだ！」

本当に喰えない人だ・・・

つーか、狼や零那って誰よ？

・・・警察ってのはみんなこうなってしまうのだろうか。

どんなになっても、ああはなりたくないなあ。

僕は、悪の幹部みたいに笑う先輩に一瞥をくれながらそう思った。  
とりあえず。

帰って、書類片付けるか・・・

6

「狼、亮さんから情報の入ったディスク届いたよ」

「捨てる。この間は豚肉解体工場の映像だったし、その前は、どっかのハードゲーム・ビー。で、今度は何なんだよ・・・まったく」

狼はディスクを手ににんまりと笑う零那に向かって、げんなりと言った。

「自分で見てみれば？」

「やだ。俺、まだ死にたくない」

「弱虫ー」

「じゃあ、テメエが見ろ」

「やだ。わたし、グロとかBLとかにや興味ないし」

「逃げやがったな！お前も見ろ！道連れだ！」

「ヤダぷー。死ぬなら一人で死んで」

「駄目だろそりや。主人公が死んだら物語が終わっちゃう」

「次回作にご期待ください」

「やだ！ ぜってーヤダ！ そんなアホらしい終わり方やだ！」

「わがまま」

「つーか、お前が結果で画像をブロックしてくれよ。そうすりや、情報だけ見ること出来る」

「つまんない」

「本音だな！ それが本音だな！」

狼は涙眼になって両手で零那の頬を引っ張った。

「言ってみろ！ この状態で学級文庫と言ってみろ！」

「わひ<sup>か</sup>やった。わひ<sup>か</sup>やった。ひ<sup>か</sup>やってあ<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>える<sup>か</sup>から、ひ<sup>手</sup>え、は<sup>離</sup>に<sup>し</sup>や<sup>て</sup>ひ<sup>て</sup>て」

「よし」

「あー。めんどくさー」

零那はぼりぼりと頭を掻きながら、ディスクを自分のノートパソコンに入れた。

「そりや」

「ホント、やる気ねえな・・・」

光と供に、ディスプレイに様々な幾何学模様が出現する。

「はい出来た」

「早っ！」

「取りあえず、これで怪しげな画像は境界内に閉じこめたから、情報だけ見えるわ」

「よーし、こうなりや後は楽だぜ」

狼は零那を押しつけ、ノートパソコンを操作する。

・・・零那の邪悪な笑みに気づかず。

パチンッ

「ん？」

**ANSWERS**

ぶつ倒れた狼を見て、零那は満足げに「ミッション・コンプリート」と呟いた。



「今夜、夢に見ないように枕の下にお守りでも入れるかな・・・」

「あれ、結構高いんだぜ。前に部屋のインテリアにしようと店で見たら、小さいやつでも二千円超えてた」

「でさ、何か分かったの？」

「ああ、あの最近新宿で有名な連中ね。それが？」

「え？　だって、あのグループって、所属メンバーでさえ警察が把握してないのよ？」

「はあ？ そんなことであるの？」

「嘘でしょ!？」

「二分化？」

「—うん」

「で、異常な奴は？」

「あの事件、確かに異常性があったけど、それをメサイアの連中が？」

「まあ、情報はお金がないと握れないしね」

「誰の食費のせいだよ？」

「さーねー。で、話がそれたけど、結局そのリーダーは誰なわけ？」

「天使」

「死んでしまえ。そんなベタベタな展開、読者が許すと思ってるわけ？」

「あくまでも噂だけだな。確信はない」

「噂ねえ。あの、『名声のある人を陥れる為に暗殺者が好んで用いる武器』のこと？」

「ビースかよ。つーか、あんま関係ねえぞ、それは。ってゆーか、俺アイツ嫌い。自己

識過剰だから・・・話戻すけど、メサイアについては調べてみないと分からない」

「じゃあ、早速、調査開始ね」

「いや。少し問題があつてな・・・」

「？」

「メサイアは謎の多い組織だ」

「そりゃあね」

「そういう、秘密結社みたいな連中は特撮ヒーローモノでない限り、アジトなんぞ分らない」

「『ここは悪の秘密結社本部』みたいな怪しげな建物建てたら、ヒーローより先に国家権力に見つかって終わりだからね。——って。まさか——」

「ああ。連中が何処にいるか、全く見当がつかないんだな、これが」

「バカ———!!」



翌日——

「おー。どうだー何か分かったかー？」

亮は相変わらず、皺だらけのワイシャツ姿で玄関のドアを開け、入ってくる。

「全然。つーか、毎度毎度何で用もねえのに来んな」

「そー言うなつて。それとも何か？この家は女の子しか入れないのか？」

亮はどっかりとソファーに腰を下ろし、懷から煙草とジッポを取り出した。

「そーだよ。上限三十までの美女、もしくは美少女しか入れないんだ」

「美少女は？」

「・・・テメエとはいつか決着を着けようと思ってたんだ」

「じょーだんだつて。つーか、零那ちゃんは？」

小気味の良い音と共にジッポの蓋を開け、くわえた煙草に火を付ける。

「買物。なんか、高島屋だか三越かで各地の名物を一同に集めた物産展やるんだと」

「へー。がっかりだな」

「やっぱ、零那狙いかコノヤロウ」

「んにゃ、お前狙い」

「・・・メサイアのことか？」

狼の問いに亮はこくりと頷いた。

「連中がたむろつてる場所、分かったのか？」

「いや、それはまだだ。だが、連中の——裏の奴らが集う集会の名前は分かった」

「何だよ？」

「ミサ。そう呼ぶらしい」

「天使に救世主<sup>メサイア</sup>、そしてミサ。随分、熱心な信仰心だな。それで何か、本拠地は礼拝堂<sup>チャペル</sup>か？」

「さあな。マジで連中のアジトは分かんねえ。各地に分散していて、本拠地とかそういうのは無いってのが正解だろうな」

「本拠地はない、ねえ・・・。幹部連中の会議とかどうするんだよ？」

「そんなの簡単だろ？カラオケ屋にラブホ、マンガ喫茶。個室なんぞ、この新宿には探せばいくらでもある。いつ警察なんかに見つかってもいいように、そういった場所の方が色々楽だろ」

「まるでテロリスト養成キャンプだな」

「あながち間違ってるねえだろ。それより狼、お前がこの間話した話、マジなのか？」

「本目を吸い終わり、亮は箱からもう一本取り出し、口にくわえ、火を付ける。」

「クーデターのことか？」

「ああ」

「・・・多分な。あんな力使える奴を揃えて、仲良しグループで終わらせるか？ 普通。

連中——まあ、俺も含めて、ヘタすりゃ一人軍<sup>ワン・マン・アーミー</sup>隊みたいなモンだから。自衛隊が出れば、そりゃあ話が別だが、警察じゃあ、一人でも鎮圧すんのはムズイだろうな」

「魔法使いは御伽<sup>おとぎ</sup>だけで終わってもらいたかったぜ」

「御伽<sup>おとぎ</sup>だよ。まったく、質の悪い冗談<sup>おとしぼなし</sup>としか思えねえよ」

ふん、と鼻を鳴らし、狼は言った。

「そりや確かに」

二本目の煙草を携帯灰皿にしまうと、亮は自分のジッポをいじりだした。

「何やってんだ？」

「整備。たまに、こうやって見ないと悪くなるから」

いじりながら、亮は「うわ、結構、発火石<sup>フリント</sup>減ってるな。どーりで火つきにくいと思ったぜ」と舌打ちした。

「いいじゃん。火いつきや、百円ライターで」

「やだ。こう、蓋開けたときのカシヤンっていう音がいいんだよ。あと、百円ライターと違って炎が優しいんだ」

「そんなもんかねえ」

言って、狼はポケットから自分の百円ライターを取り出し、しげしげと眺めた。

「しかし、連中。クーデターなんぞ起こすなんて、よっぽど社会に恨みがあるのかね」  
本体と外装を分離し、亮は慣れた手つきで本体の裏側のフェルトを止めてあるボルトを十円硬貨を使って開ける。

「まだそうと決まったわけじゃねえけどな。つーか、俺が思うに、社会に不満や恨みが無い奴の方がどうかしてるぜ。なにしろ、どんな理想郷<sup>アルカディア</sup>にだって死神はいるんだからさ」  
「まーな。でも、無いと思っても、求めちゃう。それが理想郷やら桃源郷なんだろうけどな。おー、オイルは平気そうだ」

フェルトとオイルの染み込んだ綿の間に挟まった黄銅色の発火石<sup>フリント</sup>を一個取り出し、ボルト

ト穴からスプリングと供に出てきた摩耗した発火石<sup>フリント</sup>と交換する。

「なあ、亮」

「ん？」

再び、ボルトを締め、本体と外装を合体させ、試しに、ガシリ、とホイールを回し、火させる。

橙色の、柔らかな温かみを持った炎が、ゆらゆらと揺れる。

「お前、ユートピアって知ってるか？」

「トマス・モアの小説だろ。知ってるぜ。読んだことないけど」

着火を確認すると、亮は蓋を閉じ、ジッポを胸ポケットに煙草の箱と供にしまった。

「違う。その意味そのものだよ」

「理想郷だろ？」

「今はな。だけど、元々、あれはギリシア語で『なにもない』って意味なんだ。それを『理想郷』って意味で使ったのはトマス・モアの一種の皮肉だな」

「へー。でも、ある意味で一番『理想郷』に近い言葉だな。望んでも、決して届かない。行っても、そこには何もない。ぴったりだ。やっぱ、物書きってのは言葉遊びがうまいな」

「それが仕事だからな。つーか、小説ってのは、大抵、言葉遊びで埋め尽くされてるんだよ。肝心な、読者に伝えたいことなんざ三割ぐらいだ」

「言うねー。まあ、そんなもんだろうけどな。物語も、この世界も全部、な」

「セカイ・・・ねえ」

「ん？」

「いや・・・何でもない」

「そうか。じゃあ、俺はそろそろこの辺で」

「珍しいな。零那を待たないのか？」

「ああ。そのつもりだったんだが、時間切れだ。仕事場に忠実なる後輩を残してきていてな。俺の分まで書類整理やつてもらってるんだ。そろそろ戻らんと、アイツの命がやばそうだな。今頃、お花畑か妖精さんのどちらかが見えてるぜ」

言って、亮は悪びれる素振りも微塵も見せず、下品に笑った。

そのアイツという人物を狼は知らないが、おそらくこの笑みを見たら、まず間違いなく今夜辺り、裏通りで刃物持って待ちかまえてそんなことは容易に想像できた。

「じゃあな。取りあえず、『ミサ』ってもんを調べてみな」

「ああ。つーか、それを調べてくれると俺は結構楽なんだけど」

「やだ。それをやったら、お前を雇う意味がないだろ」

「まーな。じゃあな。車に轢かれろよー」

「天使に殺されるよー」

お互い、小学生レベルの罵倒を交わし、それを別れの言葉とした。



結真 零那は、ほくほく顔で家路へと急ぐ。

今日は三越デパートの物産展。

各地の色々な珍味が一堂に集められたこの催し物にて、零那の目当ては沖縄名物のソーキそばだった。

一見、塩ラーメンに似ているが、味は全然違う。

平たい麺に絡むスープ、まるでゼリーを食しているかのような食感のソーキ。これまた沖縄名物である島とうがらしをかけると、味はさらに増す。

一度でも食してしまうと、何度も、何杯でも食べられてしまう合成麻薬級の中毒性。

なのに、東京では売っているところが少ないという哀しい現実。

それが。

それが、今日の物産展で手に入った!!

これはもう、早く食べてあげないと、この子達に失礼だ。

料理を兵器に変える女なんぞと言われている自分だが、さすがにこれぐらいは出来る。

麺を茹でて、スープを張り、湯で温めたソーキを乗せるだけ。

レトルト食品とそう大差はない。

ああ、どこから食べてやろうか・・・

何しろ、麺も、スープも、ソーキも全部甲乙付けがたいほど、うまいのだ。

やはり、麺類らしく麺から食べようか。

いや、待て。ここはやっぱり、名前の由来ともなっているソーキから食べた方がいいかもしれない。

やや。やっぱり、スープを味わってから――

迷う。

いや、悩む。

そもそも、最初の一杯はどうやって食べようか。

紅ショウガを入れようか。

島とうがらしをかけようか。

でも、最初はやはり、ソーキと麺とスープだけがいいかもしれない。

うん。

それでいこう!

頷き、脳内で食べ方を決定したとき――

一人の少年が自分の目の前にいることに気付いた。

年は十四、五ほど。

薄水色の髪に、緑色の瞳。

真っ白な詰め襟を着込み、それに合わせたように白いスラックス。

「やあ。こんにちは」

真っ白な少年は純白の笑みを浮かべ、言った。

「こんにちは」

もう一度、言った。

「・・・・・・僕はコンビニの店員じゃないんだから、挨拶は返してくれないと困るんだよ。挨拶は人間同士のコミュニケーションの基本だから。さあもう一度――」

「消えなさい」

底冷えするような声。

零那の目は少年の背中一点に集中している。

彼の、真つ白な少年の、真つ白な羽根に――

「・・・嫌われちゃった。まあいいか。今回は挨拶だけだし」

「挨拶だけ・・・？」

「うん。だけど、今度会ったときには君に来てもらうよ。君の意志関係なしに。君の力がどうしても必要だね」

「能力者のお友達が欲しければ、別の人にも頼めば？」

「きつついね。でも、僕が欲しいのはそんな有象無象の連中じゃなくて、君が欲しいんだ。いや、厳密には結真の血が欲しい、と言った方が正しいか。神すらも殺す、その呪われた血がね。分かっているだろう？『神狩りの牙』さん」

「・・・何が目的なの？」

「今すぐには言えない。何しろ、君のすぐ側には片眼鏡の番犬が控えてるから。お楽しみってやつさ」

ふふ、と無邪気に笑い、少年は言った。

「じゃあ僕はこの辺で。ああ、そうそう。僕ならソーキそばは、万能ネギと紅シヨウガをたっぷり入れて食べるね」

につこりと微笑み、少年は姿を消す。

風と、

僅かに鳴る鎖の音と共に――



「狼――」

「ん。帰ってきたんだ。お帰り。目当てのモン、買えたのか？」

狼は亮に借りたパソコンゲームをやりながら適当に応える。

画面には、緑色の髪の毛の、もはや人間と呼べるのかどうか分からないぐらい目の大きな娘が一人映し出されている。

「まあね。ソーキそばを一箱二食分を五箱。ってゆーか、何やってんのよ？」

「ん？ 恋愛ゲームだとさ。エロも飽きたし、なんか別のモン貸せって言ったら貸してくれた。高校を舞台に、勉強に、部活に励みながら恋愛に勤しむものらしい」

「それとアンタが亮さんから借りてるいかわしいゲームとどこが違うのよ？」

「さあ？ エロがないのと、ポリゴンの自分の分身が自由に動けることだろ」

「で、今はどんな所なのよ？」

「ああ。この女の子がメキシコプロレスをしようとかって言ってな。それで、今町中に覆面を買いに行っている所なんだ。ミル・マスカラスとかいうやつが趣味らしい」

「この子が？」

言って、零那はディスプレイに映し出された少女を凝視した。

少女の下には彼女の台詞らしき『エヘ。遅刻しちゃいましたあ』などと書かれている。



とても覆面レスラーが趣味とはとても思えない。  
精々、バレーボール部所属がいいところだろう。

つーか、そもそも何なんだ？その訳の分からん設定は。

「亮の話だと、この後ミニゲームに突入して、鉄拳顔負けの格ゲーに変わるらしい」

——つつこむのはやめよう。

零那は、心に深くそう刻んだ。

「……………で、部活っていうんだったらアンタは何部に所属しているのよ？」

「ん？待ってろ」

言って、狼はマウスで自分のステータスをクリックした。

名前と体力。なぜか根性までもが数値化されている。

その真ん中の方に狼の所属する部活が書かれていた。

かためがねくらぶ

……………もういいや。

活動とか、そういう次元を簡単にワープしやがった。

零那はげっそりとした顔で思った。

「——俺に話があるんだろ？」

いきなり、ゲームを終了させ、狼は言った。

「気付いてたの？」

「まあな」

ぎし、と椅子を軋ませ狼は席を立つ。

「……………天使に会った」

「なるほど。で、奴は何と？」

「わたしが必要だって。意志に関係なく連れてくって。あと、『神狩りの牙』だって」

「やはり、結真の血か——」

舌打ちをし、狼は何事か呟く。

「拙いな……………」

「ねえ。わたしって——わたしの家系って何者なの…………？」

「……………聞きたいか？」

「聞かなきゃ、そろそろいけないと思う」

「そうだな」

言って、狼は暫し黙考する。

「……………そもそも、お前、『異界』ってモンをどれだけ知ってる？」

「えーと、狼のいた場所で、安倍 晴明とそれの補佐である七太祖が治めてる所ってぐ  
らいかな」

「それは政治形態。その世界——つーか、異界そのもののこと、どれだけ知ってる？」

「え——」

「テレビやマンガ、ゲームでありがちな設定である『異界』。それをどれだけ知ってる  
んだ？」

「そう言われると・・・」  
わからない。

そこまで考えたことなかった。

ただ単純に、「異界から来たの。ふーん」で流していた。

自分のこの力もあるんだし、異界ぐらいあっても不思議はない、と。

でも、改めて考えてみると、謎が多い。

「お前、植物の細胞って分かるか？」

「それぐらいは。つーか、中退したとはいえ、これでも大学まで勉強してるのよ？」

「そうだったな。植物細胞は動物細胞と違って細胞壁があるよな？」

「それが？」

「この今いる世界ってのはな、細胞壁に囲まれたようなもんだ。隙間がいっぱいある。その間にもう一つの世界を創った。それが、異界だ」

「ねえ、それがホントなら、ガガーリンの地球は丸かったってアレはどうなるのよ？」

「いや、丸いぞ。宇宙もある。言ってるだろ、この世界全体だって。そういうの全てひっくるめて世界なんだよ。いや、師匠風に言えばセカイか。言い換えれば、異界だって丸くて宇宙もある」

「へえ」

「そして、それを創ったのが、お前の家系の本流——香耶家の長、香耶 流奈だ」

「香耶・・・流奈——」

「ああ。ちなみに、現在七太祖の長だ」

「何で、そんなもん創ったの？」

「仙人になろうとしたんだよ」

そう告げる狼の声は、どこかもの悲しかった。

「仙人に？」

「まあ、そこまで崇高な目的かどうかは知らんけど、隠居したんだよ。平安時代の後期は戦乱が絶えなかったろ？」

「まあね。あの辺はごたごたしていて、憶えるのめんどくさいのよね」

零那は忌々しく呟いた。

何か、日本史で嫌な思い出もあるらしい。

「陰陽師とかそういった連中は戦において、一騎当千の活躍をするのは当たり前だが、戦の前の吉凶などを占うなど、重要な役目を果たした。それを嫌がった変わりモン共が、このセカイを抜けて、別のセカイにを創って、そこに住んだ。それが異界の始まりなんだ」

「なるほど。でも、そこら辺でわたしの家系は何にも関係ないわね」

「ああ。まあ、その頃の結真家は地上にいたからな。つーか、そんな時異界にいたのは、<sup>ナインテイル</sup>九尾の狐を筆頭に、香耶や芦屋の一部と鎚杜<sup>つちもり</sup>本家や傀儡家などだけだ。全人口百人にも満たない」

「じゃあ、わたしの家の人間はいつ活躍するの？」

「ちよっと、植物細胞を想像してくれ。一つの細胞壁に囲まれたところに、二つの細胞が存在できると思うか？」

「無理ね。どっちかが小さくても、歪むわ」

「そう。それが世界各地で起きた。一番歪みが大きかった所がこの日本。なにしろ、ここには異界の中心があるからな。おかげでとんでもねえもんが引き起こされた」

「何？」

「降鬼戦争」

呟き、狼は言葉を切る。

「どういふもんかは俺も知らねえ。文字通り『鬼』がどこからか集団で現れたとか、まあ色々言われている。真実は七太祖ぐらいいしか知らねえだろ。まあ、その影響で日本から魔術はなくなった」

「どうして？」

「理由は様々。その混乱で一家全滅したり、異界に逃れたり、な。だが、一番の理由は後期戦争後に七太祖が魔術師を地上から抹殺するために虐殺したことだろう。そりゃあ、すげえもんだったらしい。西洋の魔女狩りと同じか、それ以上。とにかくすぐてすごすぎる。陸が骨で埋まったとか、水という水が真っ赤に染まったとか色々。それをなんとか生き残ったのが、お前ら『古き血』の連中だ」

「なるほど……。でも、どうしてそんなことしたのよ？ そんな大虐殺を」

「降鬼戦争を起こさないようにだそう。それ以外は知らない。その時からいる奴らも——つか、大将と師匠しかいないけど——話してくれないし」

「なるほど。でも、そこでもあまりわたしの家系は出てこないわね」

「これからだ。そんな虐殺、地上の『古き血』が黙ってると思うか？」

「それって——」

「ああ。反乱を起こしたんだ。しかも、ただの反乱じゃねえ。出来ちゃった異界を再び、この世界と融合させようとしたんだ。元・七太祖の一人、芦屋 道満どうまんが中心となつてな」

「芦屋……。あの、有名な？」

「ああ。異界では長、安倍 晴明の右腕だった男だ。奴はまず、自分の分家である結真にあることを命じた」

「……………」

零那は黙っていた。

まるで、何か辛いことを耐えるかのように。

「香耶家の長、香耶 流奈を超える存在を生み出すことだ。芦屋も結真も香耶の分家。能力は受け継がれている。その血を濃くすれば、対抗できるかもしれないと考えたんだろ  
うな」

「……………それで、どう……。なったの？」

「失敗した。道満も安倍 晴明に殺され、死んだ。芦屋も力を失って今じゃ普通の家だ」

「じゃあ、なんでわたしの家はまだそんなことをしているの？」

「——どうして、血を濃くするために、未だに一族同士で交わるの？」

そう、彼女の瞳は訴えていた。

「……………」

狼は目を伏せる。

彼女の瞳を、見つめぬように——

「……………言いたくないなら、言わなくていいよ」

それを察したのか、零那は優しい口調で言った。

「自分のこととか、狼のこととか、少し分かっただけでも満足だから」  
おそろく、彼女も聞きたくないのだろう。

その証拠に、体が小刻みに震えていた。

——言えるわけ……ないだろう。

その話の続きを直接自分の口からなんて。

「あー。なんか、ちよつとシリアスな顔したらお腹空いちやった」

急にぱちんと手を叩き、思い出したかのように言った。

そして、そのままソーキそばの入ったビニール袋を手台所に急ぐ。

「……………」

その、

不安を隠した明るさが、

自分を気づかった優しさが、

狼の心を鋭く剔った。

ゆっくりと。

深く、確実に、致命傷を負わせた——

ああ。

また、さっきのゲームでもやるかな。

女の子と他愛のない会話を交わして、

ちよつぱりマヌケだけど、愉快な事件を解決して、

そんな、当たり障りのないゲームを。

なあ。

もし、俺が物語の登場人物だったと仮定して。

どうして、これの作者は俺をこんなふざけた物語に配置したんだ？

こんな、

こんな、わけの分からない実にふざけた物語に——

7

「見つけたよ。『神狩りの牙』を」

眼下の宝石のような夜景を見下ろし、少年は言った。

「……………いつ頃、彼女をこちらに？」

銀髪の青年が、少年に尋ねる。

「まだだ。すぐに彼女を連れてきてはつまらない」

「……………何故ですか？」

「だって、つまらないじゃないか。すぐにボスキャラが出てきたら」

「では、自分が？」

言って、青年は自分の腰に差した刀を抜き放つ。

刀身が、月明かりの照らされ、妖しく輝く。

「……………いや。アイリーンを出そう。他にも十二使徒のメンバーを何人か。何、別に勝

とうとか、あの番犬を殺そうとか、そういうつもりはない。ちよつとした余興だよ。彼女を取り巻く連中にちよつかいを出す。それだけさ」

「分かりました。直ぐに手配します」

刀を再び鞘に収める。

「頼んだよ」

頷き、青年は闇に消える。

「さあ、大忙しだ。悪役も大変だよ」

少年は嘆息しながら、目はどこか楽しそうに眩く。

「どうせ、この世は物語なんだ。物語がつまらなければ、僕が物語を変えればいい」



深夜。

誰もいない通りを亮は一人、家路へと向かう為歩いてた。

職場は新宿にあるが、自宅はそこから少し離れた場所にある。

マンションが多いこの一帯は、深夜になれば物寂しい。

音と言え、自分の靴の音のみ。

虫の声も、風の音も聞こえない。

——まるで、通り全体が死んでいるようだ。

激しく点滅を繰り返す外灯を見上げ、亮はそう思った。

胸ポケットに入れたジップを取り出す。

もう十二、三年以上の付き合いだ。

銀色のボディには自分で入れた下手くそなイニシャルの刻印の他にも、いくつか大きな傷が目立つ。

確か高校の時、煙草を吸うときに百円ライターじゃあ格好悪いとか、そういう理由で買ったものだったが、あちこちをいじっているうちに自然と愛着が出てきた。

「そーいや、これだけだもんな。昔から持つてるもんで——」

つまり、この代物だけが亮の——まだ、普通の人間だった——昔の頃を憶えているということだ。

「……どこで、道間違えたんだろうな」

不意に出た問いは、別に誰かに答えてもらおうと思って紡いだ言葉ではない。

ただの独り言。

しかも、その答えはもう既に出ている。

十年前に——

「……………」

外灯が、突然点滅を止め、沈黙した。

沈黙。

これほど嫌なものはない。

「……………」

亮はジップを握ったまま、その鋭い瞳をさらに鋭くし、辺りを観察する。

左手にはハンターナイフ。  
油断なく逆手に構える。

沈黙。

短い、沈黙。

その沈黙を破るように、

刹那。

ひらひらと、

蝶の翅が、

亮の周囲を舞った。

否、厳密にはそれは蝶の翅ではなかった。

薄い、

透き通るような、刃――

それが、

蝶の翅のように、

妖精のように、

無邪気に戯れるように舞い、

亮に襲いかかる。

その刃は薄く、さほど傷を負わせることは出来ぬだろう。

だが。

その『傷を負わせる』という発想自体が、愚かだった。

斬。

亮の両肩、両足に、翅が襲いかかる。

「やりやがったなっ・・・畜生」

亮は奥歯をギリリと鳴らし、呻った。

腕が、上がらない。

足が、言うことを聞かない。

あの翅は決して、相手に傷を負わせ、命を奪うモノではなかった。

あれは、対象者の筋肉を、神経を、切り裂き、行動を奪う為のモノ――

翅が、再び亮に襲いかかる。

今度は左手首。

――ナイフを使わせないつもりか・・・

両足の傷のせいで、瞬発的な動作が出来ない。

なんとか、攻撃をかわしたが、手の甲に傷を負ってしまった。

畜生。

このまま、死んで、たまるか・・・！

今ある武器は、左手のハンターナイフと右手に握られたジッポだけ。

アーミーナイフは腰のホルスター。

愛銃の Colt パイソンは自宅だ。

そもそも、あんな代物はよほどのことがないと、持って来ない。

分が悪い。

畜生。

・・・ああ、煙草が吸いたい。

ひらひらと舞う、この趣味の悪い翅を見ると胸くそ悪くなる。

再び、襲いかかってくる。

今度は右手首。

普通なら、再びナイフを握る左手首を襲うはずだ。

畜生。

完全に、舐めてやがる。

じわじわと鬬り殺すつもりらしい。

だが。

だが、その余裕ぶった態度が、お前の命取りにある。

「っ・・・！　そこかっ!!」

翅が飛んでくる方向で、大体、術者がどこにいるか分かった。

わざわざ動けるのに、動かないようにしていたのはそのためだった。

今、亮には翅が襲い来るラインがはっきりと見える。

その先にいる、憎たらしい人影も――

左手に持ったナイフを投擲する。

彼が左手にナイフを握ったのは、彼が左利きだからでも、酔狂でもない。

正確に、ナイフを投擲するためだった。

ナイフは直線を描き、正確に、人影へと突き刺さる。

「グアアッ！」

人影は呻き声を上げる。

声から、おそらく少年だ。

生死は分らない。

だが、おそらく深手を負わせただろう。

「ったく・・・ガキが。俺に喧嘩吹っ掛けるからこうなるんだよ・・・」

胸ポケットから煙草の箱を出し、一本煙草を口にくわえる。

ガシリ。

「ちっ、火がつかねえ」

ガシリ。ガシリ。ガシリ。

火は一向につかない。

変だな、狼の家でちゃんと発火石交換したのに。

それに。

なんで、こんなに目の前真っ白なんだ・・・・・・・・・・？



「――で、そのまま出血多量で病院に担ぎ込まれたってわけか」

「ま、そういうことだな。ちなみに全治三週間」

豪快に笑い、亮は言った。

「救急隊員の人もびっくりしていたらしいな。まあ、火イついてない煙草くわえながら、血溜まりの中に沈んでいる中年男を見りゃあ、誰だってビビるけど」

亮は口に煙草をくわえ、ジッポで火を付ける。

「ここ病室。禁煙」

「いいんだよ。個室だから」

ジト目で咎める狼を無視し、亮は紫煙をドーナツ状に吐いた。

「しかし、病院てのはつまんねえ所だな。最初は美人な看護婦さんでもいると思ったんだけど、全員四十以上だし。飯不味いし」

「これに懲りたら、もう入院すんなよ」

「あーあ。せめて零那ちゃんが、ナースのコスプレしてくんないなあ」

「そう言うだろうと思って、あいつは連れてこなかった」

「言うと思っただぜ。どーでもいいけど、何で『看護婦さん』って言うとき普通なのに、『ナース』って言うときエロく感じるんだろーうな」

「知らねえよ」

「——話は変わるが」

亮はまだ半分も残っている煙草を缶コーヒーの缶の中に放り込んだ。

「俺のことやった連中、お前側の人間だ」

「だろーうな。でなきや、お前がやられるわけねえ」

片眼鏡を押し上げ、狼は言う。

「まあ、警察の方には通り魔ってことにしといたけどな。嗅ぎまわってることに對する警告とか、そういうもんじゃねえのか」

「もしくは宣戦布告」

「まっさかー。奴らにとつて俺らはそんなに大きな存在じゃあないだろう」

「いや。実はな、零那が天使に会ったんだよ」

「零那ちゃんが？ そりや何で？」

「さあな。そいつは話してくれなかった。ただ、天使の奴は零那を大層お気に入りだそうだ。連れてくとか言いやがった」

「何だと!? 俺の零那ちゃんを!? まさか、あのガキも俺と同じ属性だったのか!? いや、零那ちゃんの方が年上だから違うか。はっ!? まさか、ロリお姉ちゃん系!? 新手の属性か!?」

「・・・どこから突っ込めばいいのやら」

「そんなことは置いておいて」

「置いとくのかよ」

「話続かねえし。で、マジな話。何で零那ちゃんなんだ？」

「色々あるんだよ。あいつには」

「一年前の一家惨殺事件か？」

「・・・知っていたのか」

「まあな」

「そうか——」

「他にもありそうだが、あえて散策する気はねえ」



「そりや、どうも」

言って、狼は肩をすくめた。

「だが、俺が襲われたってことは——」

「もちろん、次は俺だろうな。連中がどこまで知ってるか知らねえが、多分、俺が奴らと同じ側だということぐらいは分かってるだろうな。俺の力は知らないと思うが」

「そんな楽天的でいいのかね」

「何だよ？」

「連中、そこの力持つて粹がつてる馬鹿と違うぜ。戦い慣れてる。俺とやり合った奴もだ。最後の詰め甘い、わざわざ関節の神経や筋肉傷つけて、体の自由奪う戦法なんざ、普通の奴は思いつかねえ。体の自由を奪って、止めを刺す。形違うが、ありやあ熟練したナイフ遣いの手法だ。そんな手練れが事前に相手の情報掴んでねえはずがねえ」

「なるほどな。だが心配無用だ。奴らが俺の能力知ってても『奥の手』があるし」

「奥の手？」

「ああ。文字通り奥の手だ」

言って、狼はにやりと笑った。

8

——ヤバイなんてことは最初から分かっていた。

病院からの帰り道、狼はそう小さな声で呟いた。

零那を『神狩りの牙』と言って、狙う奴でまともな奴は一人もない。

あの字は『関係者』しか知らない。

香耶と結真の者、それと一部の人間だけ——

つまり、あの天使は『関係者』だということになる。

この、忌まわしい、物語の——

畜生。

まったく、何なんだよ。

師匠が昔言ったことが不意に耳に蘇ってくる。

『狼。よく聞け。このセカイは物語。自分達は主役ないし脇役の登場人物。そして、

その物語を笑いながら読んでいる奴がいる

ふざけたことじゃよ、本当に——』

・・・そう言って、師匠は忌々しく吐き捨てた。

あの時、自分はまったくそれを信じていなかった。

運命なんて信じないし信じられない。

過去なんて振り返らないし振り返れない。

未来なんて望まないし望めない。

そういう風に生きてきたから。

名前なんてなく、

存在に理由はなく、

ただ殺し、

ただ戮<sup>ころ</sup>し、

ただ塵<sup>ちり</sup>し、

死人の山を築いてきた自分にとって、

それはあまりにも優しすぎる毒だったから。

だから――

いや。

違うな。

そんな過去なんて関係ない。

逃げてるだけだ。

考えないようにしてただけだ。

だって。

それを信じてしまったら、

零那を人間と思えなくなる。

零那。

結真 零那。

チビ。身長百五十五。そのくせハラペコ大食い。よく食べる。オバQか。五月蠅い。イライラするほど五月蠅い。胸ない。パンケーキなみ。髪長い。それをツインテールにしている。淡い栗色。撫でるとさらさらする。がめつい。パソコン上手い。よくハッキングして遊んでる。魔法使い。結界遣い。それも、既存の世界を再構築するほどの実力者。

そして――人間だ。

人間なんだ。

人間――なんだ。

……まだ。

機嫌が悪い。

気分が悪い。

だから。

だから、

「手加減する気ねえぞ。クソガキ」

狼は素早く、懐のホルスターから黒光りする銃を取り出し、放つ。

一発放ち、すぐさま二発目、三発目と間髪入れずに銃を放つ。

能力なんざ使わせない。

そのまま何も出来ずに封印される。

「これで終わりだ」

最後<sup>ラスト</sup>。

「元の陽の当たる場所へ戻れ」

ダンッ

何処にも無い場所

重い、効果音。

本物より、本物らしい効果音。

銀の弾丸が、少年の頭部を貫く。

少年はそのまま倒れ伏す。

イライラする。

本当にイライラする。

「天使だかなんだか知らねえけど、ただじゃすまさねえ・・・」

「——へえ、じゃあどうしてくれるのかな？」

声がした。

どこか、嘲りを含んだ声。

そして、背には純白の翼——

「お前が——」

天使。

この少年にこそ、その言葉が相応しい。

「殺すことも出来ない殺人鬼が、僕をどうしてくれるんだい？」

「テメエ——」

「そうだね。まだ僕を憎む憎しみが足りないな。これなら、どうだい？」

鬼子

ははははは。君のことは色々知ってるよ。異界で一度に数十人以上殺戮した殺戮中毒者  
だとか、本当はそんな髪の色じゃないとか、色々ね。色々！

「・・・・・・・・・・その名を呼んだ奴の末路も知ってるか？」

「殺せるのかい？ 僕を。いやいや、別に君が人を殺せない殺人鬼だから言ってるんじ  
やないよ？ 実力の差ってやつだよ。実力の差。所詮君は——」

ダンッ

「・・・・・・・・へえ。怒ったんだ。でも意味ないよね？ それってさ、半端者には通用  
するけど、魔術師クラスには通用しないだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そう焦るな。愉しもうよ。まだ物語は始まったばかりなんだ。あれ？ ひよつとして  
怒ってる？ 僕の手の中で戯れてるのがそんなに嫌？ そう怒るなよ。僕も君の所詮は登  
場人物にすぎない。僕はあれだ、『世界征服を企む悪の秘密結社』ってやつのかね。そ  
なもんさ。どうでもいいけど、なんであいう連中って自分で『悪』っていうのかね。そ  
んなに悪いことだと思ふなら止めればいいのに。ああ、そういう顔しないでくれ。最近あ  
まり喋る機会がなくてね。何しろ、周りには仏頂面の口べたしかいないから。えーと、話  
を戻そう。まあ、僕なんて小者だよ。だって、僕は登場人物なんだから。読者じゃない。  
読者は最強の存在だよ、君。何しろ、物語を否定できる。読まれなければ、物語は存在出  
来ない。いくら作者がつつらと文字を重ねても、それは文字の羅列であって、物語じゃ

ない。物語は、世界は、観測する者、読む者があって、初めて存在できるのだから。でも君、分かっているだろう？ 僕がこれから言いたいことはそういう事じゃないって。問題なのはむしろ、

読者でもないのに物語を読み、このセカイを管理、観測してる奴らがいる

——ことだ。違うかい？」

その問いに狼は何も答えない。

ただ、憎悪を滾らせた瞳で天使を見つめているだけ——

「・・・まあいいや。僕はここで君と殺し合うつもりはない。今回ののはそうだな。伏線つてところだ。いいだろ？ 雰囲気出ている。それではさようなら」

言って、風の音と共に天使は去る。

その風の音に、かすかに鎖の音が混じっているのを狼は聞き逃さなかった——



「なるほど。ご苦労じゃった」

言って、少女はバン、と鉄扇を広げた。

年は十三、四と言ったところだろう。

濡れたように光る長い黒髪に、平安時代の姫君が着ていたような紅い着物。

幼さが残る顔つきに、小さな体。

だが、それに反して、瞳は鋭く威圧感があり、見る者に畏敬の念を抱かせる。

「——して、祭はまだなのか？」

「うむ。では、その日は妾も参加するでしょう」

「？」

「何を驚いているのじゃ？ たまには愉しませろ」

「、——・・・」

「五月蠅い。つべこべ口答えるな。それとも何か？ 祭の変わりに貴様の皮を剥いで愉しんでもいいんだぞ？」

少女はぎろりと睨み付け、鉄扇を構える。

「・・・・・・」

「よろしい。そういう風に素直なのが一番じゃ。あのもう一匹の馬鹿犬にもそれを教えられんかのう」

「——？」

「ああ。気にするな。交戦して死んでも構わん。好きにしろ」

「・・・・・・」

「文句あるのか？」

「、——」

「よろしい」

「祭の場は？」

「マジック・フィールド」

「良い名じゃ」

言って、少女は獣のように嗤った。



陽の光が目蓋を縫うように入り込み、狼は目を醒ました。  
時刻はそろそろ午前十一時。

いつも通りの起床時間だ。

むっくりと、簡素なパイプベッドから起きあがり、ぼさぼさの金髪を乱雑に掻きむしる。  
それから、ぐるりと辺りを見回す。

小さな文机と椅子。

本棚には亮に押しつけられたマンガやら、零那から借りた書籍が並んでいる。

右隣には、公衆トイレなどにあるような簡素な鏡が掛けられている。

それ以外、何もない。

塵一つ落ちていない病的な空間だった。

よく、部屋は人の心を現すというが、この場合どういう風に分析されるのだろうか。  
そんな、ふざけたことを考えながら狼は洗面台へと足を運び、髪をとかし歯を磨く。

がちやり、とドアを開ける。

真夏の太陽が眩しい。

今日はやけに蒸し暑いな。

こういう暑い日は男に生まれて良かったと実感できる。

何故なら、簡単に上半身裸になれる。

女だと、こうはいかないだろう。

・・・さすがに、全身裸というわけにはいかないが。

隣の簡素なドアの前に来る。

表札の場所にはかまぼこ板の看板に『魔術師の巣』と書かれている。  
マジシャンズ・ネスト

「おい。起きてるかー」

乱暴にドアをノックする。

「起きてるわよ。うっさいわね」

零那はぶつぶつ文句を言いながら、がちやりとドアを開ける。  
こちらにも寝起きだったらしい。

薄水色のパジャマに、ボサボサの寝癖だらけな薄い栗色の髪。

「普通さ、外出るとき身だしなみとか整えないか？」

「うっさい。上半身裸のアンタには絶対言われたくない」

「男の特権だ。悔しかったら男になってみる」

「労働基準法違反よ！ その発言」

「・・・・・・・・意味分かんねえし」

どうやら、まだ寝ぼけているらしい。

「つかさ、普通アパートの部屋二部屋借りてるなら、事務所の方にアンタが寝て、もう一つの方にわたしが寝るべきでしょ」

「じゃんけんで負けたお前が悪い」

「ぐっ・・・・・・・・」

零那は思わず自分の右手を見つめ、「あるときパーを出さなければ・・・・」などと呟く。

「あ、あんなの無効よ！ 普通『最初はグー』で始めるでしょ！」

「パー出したお前が言うな」

かなり低レベルな争いである。

「まあいいわ。取りあえず、着替えてくるから、リビングで待ってて。見たら殺すわよ」

「そういう台詞はせめてBカップになってから言え」

「死ね」

思い切り、近くにあった殺虫剤を狼の顔面に吹きかけ、零那はがに股で自分の部屋へと戻っていく。

「俺・・・・・・・・よく生きてるよな・・・」

狼はびくびくと顔を痙攣させ、ぼったりとその場に倒れた。



狼は事務机の引き出しから、片眼鏡の入った木箱を取り出し、蓋を開け、中に収められた片眼鏡を右目につける。

それから、零那にぎやーぎやー言われたので、黒いシャツを着る。

軽く両腕を回し、体をほぐす。

台所へと向かい、コーヒーマーカーを作動させ、トースターに食パンを放り込む。

フライパンにごま油を垂らし、フライパンを温め、ベーコンを焼き、卵を二個割り入れる。

本当はこのまま蓋をした方が簡単に作れるのだが、「黄色い目玉焼きが食べたい」のだのとほざくワガママ姫のために、普通に焼く。

別に狼は料理が得意なわけではない。

だが、流石に毎食総菜かコンビ二弁当はあまりにも虚しいので、朝食だけは作っているだけだ。

そろそろ良い頃合いになってきた。

狼は戸棚から皿を二つ取り出し、フライ返しで目玉焼きとベーコン、きつね色に焼き上がったトーストを乗せる。

コーヒーマーカーからカップにコーヒーを移す。

皿とカップをトレイに乗せ、残りの食パンの入った引っ掴み、ソファアの真ん中にあるテーブルに載せる。

着替え終わった零那がソファアに腰を下ろし、両手に箸を持ち——まったく、行儀悪いな——待ちかまえていた。

「おら、エサだぞ」

沈默。

[.....]

「焼き加減が足りない。半分ぐらい白身がまだ生。あと、焦げてる」

——そう言うなら、自分で作れ。

狼は色々言いたいことを押さえながら、目玉焼きをパンに載せる。

「ん？」

「何を今更。いつものことでしょ？」

狼はパンを半分に折りたたみ、口に放り込む。

コーヒーをすすりながら、零那はテレビを指さした。

「ああ。あれな。九月にオープンするアトラクションだよ」

「魔術師になるってやつ。詳しいことは知らねえ。だけど、新宿のビル街にあれは似合

「わないやな」

零那は画面に映る塔を見やり、言つた。

「でも、何でそんなに魔法使いになりたいのかしら」

「もし本当なら、馬鹿ね……」

「魔法使いより愚かな人種はいないのに」

狼は肩を振るわせ、自嘲的に嗤った。

忌々しく五月蠅い電話のベル。

「——はい？」

『おう。狼か？ちよつと情報が入った』

「お前、入院中じゃなかったのか？」

『親愛なる我が後輩に回してもらった。持つべき物は下僕——いやいや、後輩だねえ』  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この馬鹿に一々突っ込んでいたらきりがない。

『天堂てんどうじ司学院。そこで不審な動きがあったらしい』

「例えば？」

『海外からの輸入品——それも密輸品が多く運び込まれていた。あと、別に必要ないのに医療器具なんかもだ。進学校とはいえ、普通科だぞ？ それに、かなりふざけたことも起こってる』

「何だよ、早く言え」

『死んだ——ほら、なんだっけドレ・・・なんとかって魔術で死んだ家出少年達、憶えてるか？』

「ああ。そいつらがどうしたんだ？」

『こちらの学院に転入したという形になっている。全員が、だ。身元を洗っていたときに偶然見つけて、後輩に調べさせていたんだが・・・おかしいと思わないか？』

「確かに、メサイアと何らかの関係があるとも考えられるが、ブラフの可能性もあるだろう？ そんな馬鹿でも気付くようなミスをするとは思えねえ」

『ほう。まるで天使に会ったような口ぶりだな』

「会ったんだよ。ご丁寧に宣戦布告してきやがった」

『なるほど。まあ、調べてみる価値はあると思うぞ。まだ、何の手がかりもないんだろ？』

「そうだな。そうすつか」

『なら話は早い。これから行く所なんだ。お前も一緒に来い』

「ハア？ お前、入院——」

『馬鹿か、お前は。病院っていうところはいつでも抜け出しOKなんだよ』

「嘘つくな！」

『細かいことは気にするな。で、行くのか行かないのか？』

「零那は連れて行くのか？」

『別に。どっちでもいい。ちよつと一悶着ありそうだし』

「得物はなあに？」

『梅干しこうこ』

「一切れちょうだい」

『あらアンタがつつきね』

「・・・・・・・・・・・・・・・・何やってんだろう」

『気にするな。マジな得物はナイフ二本。それとコルトパイソン一丁』

「喧嘩する気か？」

『うん』

「なるほど。じゃあ俺も色々準備しなきゃな」

『待ち合わせ場所は学院の校門だ。十四時に集合。遅刻厳禁だぞ。野郎に「ごめえーん」。



何処にも無い場所

待ったあ？」なんて言われてもやだからな』

「黙れ」

がちゃん、と乱暴に電話を切る。

「誰から？」

何故か狼の分まで平らげた零那が尋ねる。

「知らねえ。悪質な詐欺電話」

言いながら、狼はホルスターを隠すためブラックジーンズの上着を羽織り、死神の鎌を模したシルバー・ネックレスを首にぶら下げる。

「どこ行くの？」

「デート」



天堂司学院は数年前に都心に出来た比較的新しい高校である。

恐ろしいぐらい閉鎖的なのと、化け物じみた偏差値が特徴のいわゆる進学校だ。

ここは校門だというのに、刑務所のゲートのような雰囲気がある。

校舎も一面白塗りの長方形の箱が幾つも折り重なるような設計で、窓は一つもない。

「消防法とかどうなってるんだろココ・・・」

「窓は別に無いわけじゃねえらしい。ただ、見えないような作りになってるだけだ」  
亮はくわえた煙草を吐き捨て、言った。

「無駄なことを・・・」

「学習の支障にならないようにらしいぜ」

「そうかい。俺に言わせりゃ、ここは異界だよ」

狼は汚れ一つない白亜の校舎を眺め、言った。

魔術を使わずとも、結界を張り巡らせずとも、異界は作れる。

このように、一部分を外界から切り離せばいいだけだ。  
そう。

——セカイは誰にでも創れるのだ。

「・・・で、どうやって入る？まさか突入する気じゃないだろうな？」

「それも面白いな。『警察だ！手を挙げろ！』って。やってみよっか」

「・・・それって、強盗とどこが違うんだよ？」

「国家権力がバックにあるとこ」

「こりゃまた的確なご発言」

「まあ、冗談はさておき。警察つてのは結構メンドい所だな。捜査するにも何枚もの書類をサインしなきゃならん。こういう学校法人ならばなおさらだ。近所の聞き込みとは違うんだよ。それに、そもそも下っ端が単独でそんなこと出来ねえし。多分、中にも入れてくれないぜ」

「まあな。これは露骨だが、学校というのは一種の閉鎖された社会組織だからな。服はなかなか好きだが」

「・・・お前って、そういう趣味？」

珍しく亮が呆れた顔で狼を見やる。

「ブレザーならなおよし。セーラー服はあんまり好かん」

「……まあいいや。人それぞれだもんな。そういう趣味は」

「何か言ったか？」

「いや。何にも」

亮は胸ポケットから煙草の箱を取り出し、一本口にくわえる。

「……蛇の道は蛇って言ってな。入る方法ぐらい色々ある」

ジッポで煙草に火をつけ、亮は狼に一枚のカードを投げて寄こす。

カードには狼の写真とIDナンバー、そして身分が書かれていた。

国家公安委員会、と。

「何で？」

「知り合いに凄腕のハッカーがいてな。だから簡単に偽造できた。ちなみに、そのIDナンバーは今日一日有効だ。強引に割り込ませた。だから、身元調べられてもバレることはない」

「いや、俺の聞きたいことはそこじゃなくて、何で公安なんだって所なんだが……こんなもん偽造するより、書類偽造する方が楽だろ？」

狼はプラスチック製のカードをしげしげと眺めながら言った。

「お前な、警察じゃあ話してくれないだろ。こういうのは権威がものを言うんだ。公安って言った方が相手のウケがいい」

「相手って、お前まさか——」

「ああ。校長先生とお話するんだよ」

言って、亮はにやりと笑った。



「——ほう。公安の方々ですか。わざわざご苦労様です」

校長——学院長は亮の偽造した名刺を受け取り、朗らかに言った。

西洋人だが、実に日本語が流暢だ。

年は五十前後。やや後退し始めた白髪の交じった髪をポマードで固め、恰幅の良い体型によく合う茶色のベストに灰色のスラックス。

友好的な笑みを浮かべているが、どこか人を喰ったような感じ。

俗に言う、喰えない奴、と言ったところだろう。

「しかし、何故うちに？ 確か、うちの生徒で失踪した者はいませんか？」

——とぼけた口調だけど、何か知ってそうな口ぶりだな……

——ああ。このデブ小者だぜ

狼と亮は互いに、目で会話する。

「いやいや。少し調べてみたんですけどね。この間、失踪した人間の一部が、死体になって発見されたんですよ。その連中が、何故かここに転入したことになるんです。全員が全員、ですよ？ 変だと思いませんか？」

亮は丁寧な口調で尋ねる。

「・・・確かに。しかし、誰かの仕業、とかそういうことはないですか？ 私が犯人だとして、そういうのは極力隠蔽すると思いますよ。それに、何で『転入』なんですかね？ 何のためにそのようなことをしたのでしょうか？」

「さあ。それは分かりません。ですから調べているのです」  
「そうでしたな」

言って、学院長は軽快に笑った。

——らちが明かねえ。いつまでもはぐらかされてるだけだ。亮、本題を回せ  
——そうだな。そうすつか

「そして、さらに調べてみたんですけど」

言って、亮は鞆からクリアファイルを取り出した。

「ここの学院、最近何か輸入していますね？」

「ああ。はい。美術品や古文書などを少々」

「それだけじゃあ、ないでしょう？」

亮の瞳が鋭く光る。

「大麻やマリファナ、覚醒剤。合成麻薬にさらには用途の分からない薬物まで。末端価格数億。いや、数十億。よくまあ、今まで見つからなかったすな。デカイ嘘はバレないといいますが、今回のほまさにそれですな」

亮は学院長と同じ笑い方で笑った。

「・・・・・・」

「それに、必要の無いはずの医療器具」  
横から、狼が口を挟む。

「——この学校、怪しすぎるんだよ」

「つ・・・・・・！」

「色々、話してくれるとうれしいな」

亮は邪悪に笑い、額にぴったりと銃を突き付けた。



「・・・いいんですか？」

「何だい？ アイリーン」

「天堂司学院。あそこは我々メサイアにとって重要な機関でしょう？」

「別にいい。もう、同志は揃った。あそこは関係ないよ。学者達もう引き上げたし。精々、あそこの校長が困るぐらいだろう。関係ないね」

「そうですか。ところで、彼は？」

「お姫様をエスコートしにいつている」

「では、そろそろ——」

「ああ。物語を編み直す」

「世界が、生まれ変わるんですね・・・」

「ああ。そうだ」

言いながら、天使はアイリーンの髪を軽く撫でる。

「——まあ、今回の戯れは」

誰にも聞こえないぐらい小さな声で、呟く。

「どういう結果になろうとも、僕の目的は達成されるように仕組まれてるんだけどね」



「貴様ら・・・どこの組織の者だ!？」

「だーかーらー。公安から来たって言ってるじゃん」

亮はニヤニヤ笑いながら言う。

「嘘を吐くな!! あの馬鹿な官僚集団がそこまで情報を掴めるはずがない!!」

「いや、多分お前よりは頭いいと思うぞ。エリートだし」

「お前ら、何が目的だ! 金か! 薬そのものか!？」

「聞いてねえし・・・」

無視されてるのが虚しいらしく、狼はがっくりと肩を落とす。

「どっちもいらねえ。知ってること全部話してくれねえか？」

「知ってること・・・だと？」

「メサイア」

「!？」

「アタリ、だな」

「アイスだったらもう一本」

「狼」

「何だよ？」

「黙れ」

「・・・はい」

亮に怒られ、狼はソファーに体育座りする。

「この馬鹿はほつといて、話せよ早く。自分の脳漿飛び散るの見たくないだろ？」

「私は・・・私は何も知らない!! ただ金儲けが出来るとの誘いで、敷地を貸していただけだ!! 学校は何も関係ない!!」

「どうかね」

片眼鏡を押し上げ、狼は言う。

「立ち直り早っ!」

狼の立ち直りの速さに亮はぽかんと口を開ける。

「ほつとけ・・・その学校建てる資金は何処から出たんだ？」

先ほどとは違い、低い声。

かすかに、その声に怒気を感じさせる。

「!？」

「一応、財団やら寄付金やらと普通の出所はあるけれど、それらは微々たる額だ。一番この学校に投資している所・・・これの説明、してくれるか？」

「おいおい、狼。何言ってるんだよ・・・？」

「何で、日本の学校にいつら関わってるんだ? そりゃあ、上海に支部はあるが、

そこまで極東に興味ねえだろ？ 白人主義者が趣旨変えか？ あア？」

「お、お前・・・何者——」

「それは俺の言葉だ。奪うなよ」

ナイフのように鋭い視線。

その瞳は、血に染まったように紅い。

「輸入した代物の中にはいくつか呪文書も混じってたな。しかも、図書館に保管されていてもおかしくないような禁書ばっかだ」

亮の銃を押しつけ、学院長の胸ぐらを、掴む。

「答えろ」

瞳の紅さが、増す。

「ここで、何をしていた？」

「・・・製造を」

「何の？」

瞳だけで人を殺せるような、迫力。

「半端な者の製造を、だ」

「マジかよ!？」

「やっぱな・・・」

学院長の言葉を聞いて、狼は舌打ちした。

「おかしいと思ったんだ。自然覚醒でそこまで未覚醒者が発生するはずねえ。となれば、誰かが『製造』していたとしか考えられねえだろ」

「出来んのかよ？」

「一応。ただし、伝説級のまさに『秘術』だ。ネッシーやイエティ並にな。異界にも伝わっているが、やった奴はいねえ」

「なんでさ？」

「廃人になる可能性が高いからだよ。記憶障害や失語症など挙げれば数限りない。とにかく、よっぽどの馬鹿じゃなければそんなことする奴はいねえ」

言いながら、狼はさらに胸ぐらをきつく掴む。

「案内してもらおうか」

「ぐっ・・・。どうせ、私は連中に殺される」

「断るのか？」

さらに、胸ぐらをきつく掴む。

「連中にあとで殺されると、俺に今、戮られるのどっちがいい？ 選ばせてやるよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんなら、拷問っていう選択肢もつけてやる。どうする？」

亮は下品に笑いながら、ナイフをちらつかせる。

「わっ、分かった。案内しよう・・・」

その言葉を聞き、狼は学院長を解放する。

「だ、だが、一つだけ条件がある・・・」

カードキーを掴み、震える声で学院長は言う。

「何だ？」

「これは私がやったことではない。どうか、私を恨まないでくれ・・・」



「・・・・・・」

零那はラーメンどんぶりに入ったモノを淀んだ目で見つめていた。

「何で、こう、なる、わけ・・・？」

それは、数日前に零那が買ったソーキそばであった。

いや。ソーキそばだった、と言った方が正しい。

麺は粥のようにドロドロに溶け、スープはよどみ、ソーキに至っては、原型を留めるところか存在していない。

「ただ、麺茹でて、ソーキ温めればいだけなのに、何でこうなるのよ・・・」

それは多分、皆が知りたいことであろう。

「もう一回作ろうかな。それとも、狼に作ってもらおうかな。あーでも、あいつにあげたくないな・・・。うーん。どうしよう」

一人でブツブツ言いながら、麺をすする。

どんな状態になろうとも、食べ物を粗末にしないことは零那の美德の一つだ。

・・・それにしても、今日は風が強いな。

何で、こんなに強いんだろう。

それに、風に混じる鎖の音。

おかしいな。

この辺にそんな音出すところ、ないのに。

利那。

ほんの、刹那。

零那の、全身に、悪寒が、走った。

目の前に、刀を握る青年が一人。

「迎えに来た。俺と一緒に来てもらおう」

青年は抑揚のない声で言った。

鋭い刃物を思わせる瞳。

整った彫刻のような貌。

まるで。

まるで、彼は――

「狼・・・」

違うのは、狼の髪が金髪なのに対し、彼の髪が銀髪であることと、手に握る鎖に連結された刀ぐらいだろう。

雰囲気。

かすかに体から漏れる殺気。

似ている。

似ているけど、違う。  
違うけど、似ている。

何故、

どうして、

こんなに、

似ているの？

「大人しく来てくれれば、危害は加えない。約束しよう」  
言いながら、銀髪の青年は刀を鞘にしまった。

「断れば・・・？」

「強引にでも、連れ帰る」

「そうか——」

言って、零那は自分の瞳を発動させる。  
界をねじ曲げ、空間を湾曲させる、力を——

「俺は奴と違い、優しくない」

青年の姿が、零那の視界から消える。  
くそう。

これでは、力が発動出来ない。

「眠れ」

刹那。

零那の首に、手刀が叩き込まれた。

奴。

誰のことだろう——？

微睡む意識の中、零那はそう思った。



「こりゃあ——」

それ以外、亮は言葉が紡げなかった。  
学院長が案内した場所。

そこは、手術室のような場所だった。

簡素なベッドと无影灯が二つ。

心電図やら点滴台などが、それらを囲んでいる。

そして、そのすぐ隣の鉄格子。

そこには、幾体もの『失敗作』が打ち棄てられていた。

「悪の軍団、ショッカーのみなさんもここまでじゃなかったぜ・・・」

亮は鉄格子を見ないように、低く呟いた。

「そりゃあ、子供番組だからな」

「・・・今更だが、ここはどんな場所だ？」

「製造工場、だろ」

狼は学院長を蹴飛ばし、言った。

「これで神隠し事件の謎が解けたな。失踪した連中は、ここで材料となっていた。そう  
だろ？」

「ちゃ、ちゃんと合意の上だ。どうなってもいい。どうなっても、『特別になりたい』  
と言って——」

「あア？」

亮は、うずくまる学院長の顔面を思い切り踏みつける。

「何だア？ その言い訳は。テメエは、どつかの中学生にエロいことやって言い訳して  
るクソオヤジと同じか？ このデブ、調子コイてんじえねえぞ？あア？」

それから、思い切り、学院長の腹を蹴飛ばした。

何度も何度も。

泣きながら。

「ざけてんじやねえぞ!? こんな風に人間、扱っていいのかよ!! そもそも、人間なのか  
よ、コレ。コレ、本当に人間なのかよ、えエ？」

亮は鉄格子を指さし、叫ぶ。

叫びながら、蹴り続ける。

何度も何度も。

泣きながら。

「もう止めろ」

狼は静かに亮を制す。

「ちいせえ奴殺して、人生棒に振りたくねえだろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おそらく、密輸品の薬物はこいつらに投与されたんだな。薬物で理性剥ぎ取って、極  
限状態で無理矢理覚醒。出鱈目だよ、本当に」

「お前——」

亮は狼の胸ぐらを思い切り掴む。

「こんなモノ見て、何で冷静なんだよ・・・・？」

「・・・・・・・・冷静なわけ、ないだろ？ こんな所で冷静になれる奴なんていねえよ」

「なあ・・・・」

「何だ」

「魔法使いって、何なんだよ？」

「そんなこと——」

狼は亮の手を外し、片眼鏡を押し上げる。

「俺が知りたいよ」

「それもそうだな・・・・で、どうするんだよ。流石の俺でも、これは隠蔽出来ねえぞ？」

「それなら平気だ。異界にそういう専門がいるから」

「魔法でも使ったか？」

「多分な」





以前。少年の『力』はコレだった。

銀色の手の平サイズの冷たい、モノ。

蝶々のように優雅に展開させ、中に封じられた『力』を現世に解き放つ。

別にコレで誰かを殺したわけではなかった。

ただ、自分の力を目に見える形で現してほしかった。

今となつてはただの文房具。

人を殺すには小さすぎるし、

物を削るには不安定すぎる。

価値の無くなった文房具。

それをポケットの中で弄ぶ。

「最後ぐらい、使ったっていいよね・・・」

天使の笑みを浮かべ、純白の少年は言った。

「・・・結局。僕は何をしたいんだろうね。世界を編み直すなんて言つたって、そんなこと出来るとは思つてないし」

ポケットの中で、銀色の文房具が踊る。

「ああ。そうか・・・」

ふと、ポケットの中の手が止まる。

「僕はただ単純に、あの連中に一泡吹かせたいだけなんだ・・・」

ポケットから、銀色の文房具を取り出す。

「まあ、もつとも——」

慣れた手つきで展開させ、光り輝く『力』を現世に解き放った。

「これも、物語の一部かもしれないけどね・・・」



狼は無言でボロアパートのドアを開け、無造作に靴を脱ぐ。

胸くそが悪い。

イライラする。

目の前に、刀を握る青年が一人。

「お前——」

「久しいな。神鎌 狼。それとも鎖に繋がれし魔狼と呼んだ方が適切か？」

銀髪の青年は不敵に笑い、言った。

「何しに来たんだよ、カタナ」

「何しに・・・か。お前は俺が、お前との親睦を温める為に来たとでも思っているのか？」

「いや。全然」

狼はホルスターから銃を取り出し、カタナに向ける。

「零那はどこだ？」

「さあな」

「・・・・・・何故、お前が天使の側にいるんだよ？」

「お前が知る必要はない」

斬。

鎖の音と共に、刀が鳴る。

その風を纏った鋭い刃先が、真っ直ぐに狼の頭部へと振り下ろされる。

狼はその剣撃を一刹那でかわし、カタナに銃弾を叩き込む。

銀の銃弾が、放物線を描くようにカタナを襲う。

「面白いな」

「何がだよ？」

その銃弾全て叩き落とし、カタナは笑う。

「古より、狼男は銀の弾丸で倒すモノ、と相場は決まっているのに、その狼男が銀の弾丸を使うとは、これが笑わずにいられるか」

「本なんざ、滅多に読まねえくせに妙なことは知っているんだな」

「ああ。最近、図書館をよく利用するからな」

「何でだよ？」

「お前には関係ない」

途端。カタナを中心とし、突風が巻き起こる。

側にあつた家具などの調度品が無惨な姿に変わる。

「ああ。俺のレンブラントが！」

「どうせ模造品だろう。それより、自分の命を心配したらどうだ？」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるぜえ・・・・！」

「出来るのか？」

ぶん、と自分の刀を振り、中段に構える。

「殺せない殺人鬼に、殺せる殺人鬼を殺せるのか？」

「お前だって、その村正に殺戮を強制されてるだけだろ・・・・？」

言って、狼はカタナの握る刀に一瞥をくれる。

カタナの持つ、鎖に連結された奇妙な刀。

それは、通称『呪われた武器』と呼ばれる世界に五つある武器の一種だった。

今から数百年前、五人の魔術師によりそれぞれ生み出され、今日に至る。

この武器を持つ者は、『手』と『眼』の力を全て封じられ、その代わりにこの武器達によつて、絶大なる戦闘力を引き出される。

強大な魔道具製造の技術が消失した近世には珍しく、希に遺跡で発掘される神世の時代の魔道具とも互角の力を持つ武器だったが、重大な欠陥が存在した。

・・・・千人の血をこの武器に吸わせなければ、この武器に体を支配されてしまうのだ。

その為、この武器を手にした者は皆、絶大なる力を手に入れるため、殺人鬼と化す。

たとえ、千人の血を捧げられたとしても、結果は変わらない。

自ら進んで狂うか、武器に強要され狂うか、しか道はない。

故に人々は呼ぶ。

呪われた武器、と――

その武器を構え、カタナは不敵に笑う。

「俺は別に強要されているわけではない」

中段から、下段に構えを直す。

「俺は自由人だ。誰も俺を縛ることは出来ぬ」

「そうだったな。お前はそういう奴だもんな・・・」

狼はギリリと奥歯を鳴らし、再び銃を構える。

「じゃあ、俺が縛って強引に聞き出してやるぜ!!」

発砲。

本物より、本物らしい銃声が、部屋に響く。

「殺せない殺人鬼でも、捉えることは出来るだよ!」

狼の瞳が紅く光る。

全てのモノの動きを停める力が、開放される。

「――だから」

下段から中段、それから真っ直ぐに衝きの構えに構えを直す。

「お前は甘いんだ」

断。

その力を発するよりも速く、刀が動く。

剣先は真っ直ぐに狼の腹部を貫いた。

「なっ――」

あまりの突然の衝撃に、狼はその一撃をまともに受ける。

腹部を押さえ、がくりと膝を折った。

「安心しろ。内臓器官や重要な血管は傷つけていない。しばらく、動けなくなるだけだ」

血糊を振り払い、カタナは自分の刀を鞘にしまう。

「本気を出せば、結果はもう少し違っていただろうにな」

「出せるかよ・・・こんな所で」

「ふん。まあいい」

カタナは狼に視線を合わせるよう屈んだ。

「新世界の胎動を見なければ、マジック・フィールドへと追ってこい。特等席で感染さ

せてやる」

「・・・そいつはいいな。入場料はいくらだ?」

「二千四百円だ」

「高いな、結構・・・」

呟き、そのまま狼は気を失った。



まったく、今日は最悪の日だ。

学院長は、何度も何度も心の中で反芻した。

体中のあちこちが痛い。  
当たり前だ。

何本かは分からないが、折れている。

くそう。

くそう。くそう。くそう。

たかが有色人種にあそこまでやられるとは・・・！

憎たらしい。

黄色い猿が、声を発し、思考するだけでも胸くそが悪くなるというのに、その猿にここまでの手傷を負わせられるとは。

野蠻人め。

下等生物を実験台にしようとも、別に構わないだろう。

奴らはネズミやモルモットと同じなのだから。

くそう。

このままでは終わらせんぞ。有色人種共め。

いつかきつと、この仕返しはさせてもらう・・・！

その前に、まずは脱出だ。

連中はこのまま自分を放っておくつもりはないだろう。

いずれ捕まり殺される。

そうなる前に、どこか遠くへと逃げなければ。

どこか、遠くへ――

目の前に桃色の長い髪を持った幼女が一人。

年はおそらく五歳ぐらい。

葬式に着るような黒いワンピースを身に纏い、場違いな笑顔を浮かべている。

少女は無邪気な笑顔で、

「こんにちは。ぶっ殺しに来ました〜」

と、言った。

「誰だ!? 連中の刺客か!? それとも、この国の魔術師か!?」

「どっちもはずれだよお?」

「私を馬鹿にしているのか!? お前みたいなガキ、いくら魔術師でない私でも一捻りで

殺せるぞ!!」

「ふーん。デブが随分と生意気なこと言うね」

少女はにっこりと微笑み、言った。

「貴様っ・・・!!」

学院長は怒りにまかせ、近くにあった点滴台を振りかぶる。

「死ねエエエエエエ!!」

「だからさ――」

少女は嗤う。

無邪気に、嗤う。

「・・・あんま、ちょーしブツこいてんじゃねえよ、ゴミ」  
その点滴台を払い除け、学院長の両手をもぎ千切った。  
まるで、人形を壊す幼児のように――

「グアアアアアアッ!!」

「下等生物を見ていると胸くそが悪くなるんだ。あはっ！ 同じだね！」  
そして、次は両足。

「貴様、一体――」

「知らなかった？ 化け物だよ！」

少女は笑いながら、学院長を解体する。

「化け物――まさか!？」

「もう少し、早く気付けばよかったのにね」

少女は全身を真っ赤に染め、手には脈動する紅い塊――

「アタック・レコード星々の記憶の――！！」

「大正解。あはっ！ 百点だ！」

ソレを引き千切られ、学院長は絶命した。

「ただし、千点満点だけどね」

9

時刻はそろそろ午前零時になろうとしていた。

「・・・・・・ここか」

狼は、蔦の絡まる煉瓦造りの塔を見上げ呟いた。

「しっかし、マジで二千四百円だとはな・・・」

それから、料金表に書かれた料金に目をやる。

「・・・律儀な奴だぜ」

狼は頭を掻きむしり、もとは自動ドアであろう重い扉を開ける。

金を払う気は毛頭無い。

・・・まだ正式には開園していないし。

◇

そこは受付だった。

まだビニールのかぶったパソコンが数台、カウンターに置かれている。

狼はホルスターから黒光りする銃を抜き放つ。

ここは何の気配もない。

静まりかえっている。

不気味なほどの静寂だ。

「招かれてる・・・ってことか」

舐められてるな。

完全に。

・・・先ほどの傷が痛む。

とつくに回復していると思ったのだが・・・

「こりゃあ、早く片付けねえとな・・・」

案内図を一瞥し、ざっとこの建物の地理を把握する。

全部で十五階。

そのうち、一階から七階までがショッピングモールやレストラン街。

八階から十五階までがアトラクション。

そのどこかに、連中と零那がいるはずだ。

エレベーターは稼働していないので、階段で行くしか移動手段はない。

零那・・・

未だに、連中の目的が分からない。

最初はクーデターだと思ったが、結真の血縁を使うにしては規模が小さすぎる。

まさか、本当に世界を手に入れる気か・・・？

有り得ない。

そんなことをして、一体何の得になるというのだ。

だが、あの人外の力を利用してすることといったら、そのぐらいだろう。

それか、世界そのものを潰す、か、

それとも、自分達のように――

畜生。

胸くそが悪い。

どうする？

このまま引き下がるか？

自分が動かずとも、異界の連中がいずれ来る。

それだけ、零那は――結真の血は異界にとって必要なのだ。

自分が出る幕ではない。

自分の任務はあくまでも零那の警護。

荒事は任務外だ。

けれど、体が勝手に動く。

勝手に、零那を助けようと動く。

これは。

償いのつもりなのか・・・？

彼女を救うことで、血に染まった体を清めるつもりなのか・・・？

そんなこと――

出来る、わけが、ない。

自分の罪がそんなに簡単に消える訳がない。

染みついた黒ずんだ血が、拭われることはない。

決して、自分は救われない。

それは生まれたときから決まってる。

それは生き続ける限り決まってる。  
本当は、

俺はどうしたいんだ？

零那を救いたいんじゃないんじゃないのか？  
罪を償いたいわけじゃないんじゃないのか？  
ただ。

ただ、俺は。

死にたがっているだけなんじゃないのか？  
生まれたときから。

生き続けている限り。

ずっと。

ずっと。

ずっと。

死にたがっている。

決して、自分を殺すことが出来ないから。

沢山人は殺せるのに、自分は殺せないから。

だから。

だから、きつと。

誰かに、殺してもらいたいのじゃないのか・・・？

・・・・・・お笑いだよな。

馬鹿げてやがる。

「さて——」

片眼鏡を押し上げ、狼は呟く。

「ブチ戮るとするか・・・」



「ったく、あの番犬め。どこから情報を嗅ぎつけたきたんだか。もつとも、犬は鼻が良  
いから仕方ないか」

天使はモニタールームから狼を眺め、呆れたように呟いた。

「どうしますか？」

隣にいたアイリーンが天使に問う。

「どうするも何も、迎え撃つしかないだろう？」

「では、わたしが——」

「そうだね。じゃあ、十二使徒を出そうか」

「全員を、ですか？」

「まあ、全員って言っても、もう十人もいないけどね。あの番犬に返り討ちにあつたか  
ら。彼ら——君を含めて——をアトラクションゾーンにそれぞれ一人ずつ配置しよう」

「何故ですか？ 全員で彼に襲いかかる方が、得策だと思いますが——」

「つまらないじゃないか。それに、そういう行為は、長い歴史を培ってきた少年マンガの伝統を否定することになる。せつかくお誂え向きに塔なんだ。一階につき、一人。これで充分だろう？ 最上階はもちろん僕。そうだな。屋上ででも待つとしよう。これが冬だったら、結構厳しいけれど、今は夏だからね」

「分かりました。では早速連絡します」

「おいおい。それだけかい？ もっとこう、突っ込んでも良いんじゃないのかい？ このマンガオタクめ、とか色々」

「わたしはあなたの命令に従うだけです」  
「つまらないね」

「すみません」

「まあいいさ。早速準備してくれ」

「分かりました」

「我が主——」

それまで黙っていたカタナが口を開く。

「何だい？」

「『神狩りの牙』はどうしているのですか？」

「彼女は祭壇にいるよ。儀式まで、あと僅かだからね」

「そうですか」

「今宵は実によい満月だ。まるで神様も新世界の祝福してくれるようだね」

言いながら、天使は笑った。

「——でもさ、本当は偶像かみさまは見ていただけなんだよね・・・」

「では、わたしはこれで」

言って、アイリーンは部屋を出る。

「俺も、様子を見てこよう」

「いいよ。客人はここで寛いでくれ」

「そうもいかない。奴には借りがある。仕留めるのは俺だ」

「そうかい」

「そうだ」

じゃらり、と鎖の音を鳴らしながらカタナは部屋を出る。

「・・・まったく」

一人残された天使は軽く嘆息する。

「どうして、こう、僕の周りにはつまらない人間が多いんだろうね・・・」



八階。

そこは、指輪ロード・オブ・ザ・リング物語の世界に紛れ込んだような内装だった。

ツタが生い茂った古城に、深い緑の森。

小さいが、本物の水の流れる小川もある。



——良く出来ているな  
素直に狼はそう思った。

「しっかし、いくら金が掛かってるんだか・・・」

何となく、入場料だけで二千四百円掛かる理由が分かったような気がした。

「——さて」

眩き、狼は銃を構える。

「出てこいよ。かくれんぼはつまんねーだろ？」

静寂。

「・・・んじゃ、無視して行くか」

あっさりと銃をホルスターにしまい、狼はすたすたと次の階に上がる階段へと歩き出す。

「ちよつ、ちよつと待った！」

慌てて森の中から少年が現れる。

「何だ、いたのか」

「何だじゃねえ、どうして無視して行くんだよ!？」

「めんどい。お前みたいな三下相手にしてる暇はねえんだ。とつとつ、羽根生えたクソガキの所にいかなきゃならねえからな」

狼は心底めんどくさそうに言った。

本当にどうでもいいらしい。

「普通、こういう塔では一階につき一人いて、一人ずつ倒していくのが常識だろ!？」

少年は階段への道をふさぐように立ちはだかる。

「うるせー。俺はよく非常識な奴と言われるんだ。それに、テメエみたいなライトノベルになっても、挿絵に出てこなさそうなキャラに用はねえんだよ。そどこけ。目障りだ」

「んだとつ!？」

少年の周りに、無数の蝶の翅のような薄い刃が舞う。

「・・・切り刻んでやるよ。全身動けなくなって悶え死ね!!」

「邪魔だ」

刹那。

いつの間にか、ホルスターから取り出した銃を放つ。

銀色の弾丸が放物線を描き、少年の額を貫く。

「封印完了」

眩き、気を失っている少年を足蹴にする。

・・・通常、主人公にあるまじき行動である。

「ったく、つまんねえな・・・」

言って、狼はボリボリと頭を搔き、そのまま階段を上がっていった。



——そこは煉獄だった。

小川を流れる水は黒ずんだ血。

陸地は肉塊や砕かれた骨。

全部、自分がやったモノだ。  
全部、自分が創ったモノだ。  
まさに、煉獄。

この世の煉獄。

決して救われない魂達が群がる、  
哀しい煉獄。  
その中心に、自分は一人佇む。

血塗れの服を身に纏い、

血に濡れた刀を握りながら――

力が欲しいわけでもなかった。

特別であろうとも思わなかった。

ただ単純に、

幾人ものニンゲンを<sup>おうさつ</sup>塵殺し続け、  
気がつけば、

自分は特別になっていた。

誇れることではない。

誇れることでもない。

大したことではない。

大したことでもない。

楽しいと感じたこともないし、

愉しいと感じたこともない。

自分は名も無き殺人鬼。

息をするように、

食事をするように、

人を、殺す。

そうしなければ、自分が死んでしまう。

この呪いのせいではない。

そもそも、この呪いは自分で受け入れたモノだ。

何のために？

理由などない。

理由など、名前のように必要ない。

必要――――ない。

自分に必要なのは価値だけだ。

人を殺せる『剣』という価値だけだ。

それ以外は何もない。

ある日、一人の殺人鬼に逢った。

人を殺さない殺人鬼。

人を殺せない殺人鬼。

それを見て、

最初に見て、  
自分は嗤った。  
そんな出来損ない、  
そんな矛盾だらけの失敗作、  
そんな奴、

生きている価値、あるのだろうか、と

嗤った。

嗤って。嗤って。嗤った。

しかし、

そんな自分を、彼は笑った。

笑った。

笑って。笑って。笑われた。

お前、楽しくないだろう？

と言いながら。

楽しい？

楽しい？

そんなこと、感じたこと無かった。

自分に必要なものは価値だけだから。

人を殺せる『剣』という価値だけだから。

生きてて、つまんねえだろ。お前

殺人鬼は言った。

殺せない、欠陥製品の殺人鬼は言った。

つまらない？

詰まらない？

そんなこと、考えたこと無かった。

自分に必要なものは価値だけだから。

人を殺せる『剣』という価値だけだから。

でも。

でも。

でも、なんとなく。

——そういうのが、ほしくなった。

楽しいとか、

愉しいとか、

つまらないとか、

詰まらないとか、  
そういうのを、  
体験してみたくなった。  
これは何となく。

理由などない。  
理由など、名前のように必要ない。  
自分に必要なのは価値だけだ。  
人を殺せる『剣』という価値だけだ。  
でも。

でも、それ以外の価値も欲しくなった――



十三階。

ここは墓所のような作りだった。

ご丁寧にホログラムの屍人<sup>グール</sup>や蠢く骸骨<sup>スケルトン</sup>などの死に損ない<sup>アンデッド</sup>などが闊歩している。

「ここはシステムが生きている・・・？」

狼は蠢く骸骨<sup>スケルトン</sup>のホログラムに触れ、呟いた。

手はそれに直接触れることなく、虚空を掴む。

「ここだけ・・・何でシステムが生きているんだ？」

今までの階は全て、ホログラムはおろか、照明までもついていなかった。

それなのに、ここだけは全てのシステムが稼働している。

「いよいよ、本気ってことか・・・？」

九、十階には誰もいなかった。

十一階にいた人間は話にならなかった。

十二階にも、誰もいなかった。

「案外、亮の言っていたこともアテにならない・・・」

何が、戦闘訓練を受けている戦闘のプロだ。

確かに連中は戦い慣れてはいたが、大したことはなかった。

それとも、俺が強いのか・・・？

――当たり前か

連中は能力を与えられたとしても、普通の人間だ。

人外の化け物に勝てるはずがない。

「お笑いだよな・・・」

銃を構え、低く呟く。

「さっさと、済まそうぜ。俺は暇じゃないんだ」

ブンッ

ホログラムが、ぶれる。

眼前に、黒衣を纏った少女が一人――

「お初にお目に掛かります」

黒衣のドレスの裾を少し挙げ、少女は言った。

少女の長い金髪が、部屋の空調で揺れる。

「本名はあえて名乗りません。アイリーン、と呼んでください」

「あっそ」

つまらなげに、呟く。

「さっさと殺<sup>や</sup>り合おうせ。つまんねえだろ」

「そうさせていただきます」

呟き、アイリーンは自分の力を発動させる。

そして、近くに置かれた鳥の入った鳥籠を持ち上げ、その中から鳥を一羽取り出した。

「これが、わたしの能力です。よく憶えておいてください」

鳥が、アイリーンの手の中で悶える。

声にならぬ声を上げ、やがて絶命した。

「・・・テメエか。奪<sup>ドレイ</sup>取の力使う奴は・・・」

「はい。もつとも、わたしはこれを奪<sup>ステイル・ソウル</sup>　魂と呼んでいます」

「・・・そいつは、奇襲性が問われる能力だ。何故、俺に教えた？」

「これは一瞬に人を殺す能力です。だからせめて、自分がどうやって殺されたか知ってもらいたかったのです。自分がどうやって死んだか知らずに死ぬのは辛いでしょうから」

「ご丁寧なこった。最近の殺し屋は随分と説明好きだな。ありがとう」

言って、狼は銃をアイリーンの額へ向ける。

「じゃあ、礼だ。とつとと消えろ。邪魔だ」

引き金に、力を込める。

銃口から銀の弾丸が発射され、アイリーンを襲う。

「・・・無駄です」

呟き、アイリーンは銃弾から素早く身をかわす。

「どうかね」

狼の眼が、血を混ぜたように紅く染まる。

全てのモノを停める凍結眼の力が、開放される。

「捕らえたぜえ！」

停止しているアイリーン目掛け、狼は銃を放つ。

が、

「ちっ、ホログラムか！」

このフロアのシステムが全て稼働しているのは、伊達でも酔狂でもなかった。

おそらく、この屍人<sup>グール</sup>や蠢<sup>スケルトン</sup>く骸骨に混じり、何体かアイリーンのホログラムも混じっているだろう。

ホログラムは、自身を守る盾にもなるし、自身の力を闇に紛れて使用する為の矛にもなる。

彼女がわざわざ能力を見せつけても、奇襲性を失わない理由はここにあった。

——完全に、彼女の術中にはまっていたということか・・・

狼は内心で舌打ちした。

最悪だ。

今までの連中とは桁が違う。

緻密に計算し、策略を張り巡らす。

まさに、策士——

「畜生。姿が見えても、ホログラムだらけなんて、見えないのと一緒にだ」  
こう、墓場をイメージした場所だと、いくら照明があろうと薄暗い。

そうになると、ホログラムと本物を見分けるのは困難だ。

「マジでヤベェ・・・」

せめて、千里眼や万里眼などの力があれば別だが、そんな都合の良い物などもない。  
い。

自分にあるのはモノの動きを停める力だけ。

・・・多分、向こうは自分の力を知っている。

だから、こんな突飛な策略を思いついたのだろう。

それに比べ、自分は彼女の力をほとんど知らない。

彼女が未覚醒者か、魔術師かも分からないのだ。

闇の中から、アイリーンの魔手が伸びる。

人の魂を喰らう、『手』が——

素早く、それをかわす。

危なかった。

あと、もう少し遅ければ確実に死んでいただろう。

魔手が、再び、闇に紛れる。

フロアに響くのは空調の音だけ——

久しぶりだ。

ここまで、追いつめられるのは。

——くっくくくく・・・

愉快的じゃ、ねえか・・・

狼は嗤った。

残忍なほど、残酷に笑った。

瞳の紅さが、更に増す。

周囲の気が、シン、と静まりかえる。

狼の影が、ざわり、と蠢く。

影に、一対の蝙蝠の翼に似た皮膜状の翼が、映る——

ホログラムが、いや、この部屋全体が、停まる。

停まる。

停止——する。

絶対停止。

刻すらも、刻むことを許されない、  
完全なる停止。

「―――!？」

アイリーンはただ驚愕するしかできなかった。  
いや、驚愕する時間すらも彼女は与えられなかったかもしれない。  
停止していたのは僅か一秒足らず。  
それでも、それは永遠のように思えた。

眼前には紅き瞳を持つ悪魔が一人――

手には何も凶器は持たず、

――ただ、狂気を握っていた。  
途端。

ブン、と自分の体が吹き飛ばされた。

人ごとのように。

他人事のように。

吹き飛ばされた。

実感が湧かない。

近くの墓標に打ち付けられる。

気分は、十字架に架けられたキリストのよう。

それでもまだ、実感が湧かない。

足が動かない。

停まったように、動かない。

眼前には紅き瞳を持つ悪魔が一人――

殺・・・さ・・れ・・・・・・・・・・・・る。

悪魔の右腕が、自分へと振り下ろされる。

狂気を握る右腕が、自分の頭部目掛け、振り下ろされる。

振り下ろされる、が――

それをがしり、と左腕で掴む。

苦悶に満ちた、悪魔の貌。

何事か呟き、右手を払い、ホルスターから銃を取り出し、それを放った。

本物よりも、迫力のある音。

それきり、アイリーンの意識は遮断された。

◆◇◆◇◆

「アイリーンも駄目だったか。もうちよつと、勝負になると思ったんだけどねえ」  
モニターを見ながら、天使は呆れたように呟く。

「まあ、他の『特別な力』、与えられて粹がってる馬鹿共よりはまだマシか……。あ  
あ、でも、これでほぼ十二使徒は壊滅か……。残念だな。まだ、もう少しは保つかと思  
ったんだけど……。これも仕方ないか。十二使徒は異界やら協会の連中を牽制する為の  
盾だから。矛だとは思ってなかったし……。」

呟き、モニターの電源を消す。

「……。さてさて。僕はそろそろ彼を待つとするかな。夏とはいえ、深夜の屋上は結構  
冷えそうだ。天気予報だと、雨降るって言ってたし……。やだなあ、ビニール傘差して  
待ってるボスキャラなんて格好悪いよ。いや、まったく」  
言って、天使はそのままモニタールームを後にした。

◆◇◆◇◆

「——よう」

言って、狼は眼前にいる銀髪の青年に軽く手を挙げた。

「十四階はお前ってことか？」

「そのようだな」

銀髪の青年はじやりと、鎖を鳴らし刀を構える。

「……。ところで、そこで伸びてる奴は何だ？」

狼の指さす場所には、十七歳ぐらいの青年がぐったりと倒れていた。

「急病でな。腹痛らしい。それで俺が代わった」

「あっそう」

「そうなのだ」

「明らかに後頭部殴っばいけど？」

「……………」

「……………」

「……。いや。後頭部強打だったかもしれん」

「お前の、その鋼入りの鞘に、か？」

「……………いや、近くのゴミ箱に」

「嘘言うな」

「……………」

ボリボリと頭を掻き、青年は呻る。

「バレてんだよ」

「やはり、潜入捜査は柄に合わないのかもしれん」

「だろうな」

言って、狼はカラカラと笑った。

「で、連中の主要戦力は？」



「十二使徒と呼ばれる未覚醒者と戦闘訓練を受けた少年少女らだけだ。正直、大した戦力ではない。クーデターを起こそうにも、多分この国の軍隊に鎮圧されるだろう」

「ここには軍隊はない。自衛隊だ」

「・・・・・・むう。めんどくさいな」

「仕方ないだろ。それが政治つてやつだよ」

「・・・・・・そういうものか。まあいい。話を戻そう。連中の戦力はおそらく、攻めるものではない」

「護るもの・・・・・・ということか」

「そうだ。連中は結真の血脈の者を使い、何らかの儀式を行うらしい」

「その為の時間稼ぎか・・・・・・なるほどな。で、何の儀式だ？」

「さあ。そこまでは分からん」

「役立たず」

「そのようなことを言われても困る」

「・・・・・・しかし、何でお前が活動しているんだ？他の連中は？」

「いや・・・・・・その・・・・・・いるにはいるが・・・・・・」

「まさか、あの婆さんがいるんじゃないだろうな・・・・・・？」

「ろっ、狼。お前、そのような発言を——」

「命知らず、とても言いたいのか？だが、いくらなんでも直ぐ側にはいないだろ？」

「い、いや、実は——」

銀髪の青年は冷や汗をびっしりと掻き、狼狽する。

「それより、カタナ。お前、俺襲ったとき、何で手加減しなかったんだよ？おかげで、まだ傷が治りきってねえぞ」

「それは——」

「妾<sup>わらわ</sup>が命じた。死んでも気にするな、とな」

凜とする声が、フロアに響き渡る。

狼は、引きつった顔でその声の主を見やる。

明らかに、体が震えている。

そこには、十四、五歳の少女が一人。

腰より長い黒髪は濡れたように光り、服装は平安時代の姫君の着るような紅い着物。

瞳は鋭く、まさに眼力だけで人を殺せるような瞳。

その瞳に、うつすらと怒気のようなものが揺れていた。

「——ところで、誰が婆なのじゃ？」

「・・・・・・」

だらだらと、全身から冷や汗が出ているのがよく分かる。

「上お等おお・・・・・・じゃあないかあ・・・・・・？・・・・・・ええ？　よくも弟子の分際でそのような戯れ言をほざけるの？　んん？　それなりの覚悟がなければそういうことは言えぬよな？」

少女は、バン、と鉄扇を広げる。

「……すみませんでした。七太祖長、香耶かぐや流奈様るな。平にお許しください」  
「……ほう。謝れば済むと思っておるのか？ 謝って済むなら、葬儀屋はいらんと思  
うが……どうじゃ？」

「まっ、まことにその通りでございます。お師匠様」

「あ、カタナ！ お前、裏切ったな！」

「命には代えられん。命は一番大事なものののだ」

「殺人鬼が偉そうに」

「お前だって殺人鬼だろう？」

「お前と一緒にするな」

「同じだ」

「同じじゃない」

「一緒だ」

「一緒でもない！」

## お前は黙ったらどござい！ 駄犬共!!」

怒りの頂点に達した流奈が叫ぶ。

ビリビリと、大気を振るわせるような声。

「貴様ら本気でぶち殺すぞ？ あア？ それにカタナ、お前、よくもガキ共あんまり残して  
おかなかったな！ つまんないじゃろう！ 腹いせに皮剥ぐぞ？ んん？」

「……申し訳ありませんでした」

泣きそうな顔で、カタナが謝罪する。

「もうよい。それより、連中がやろうとしていることだが、おそらく、彼女の封印を解  
除することじゃろう」

「ちよっ——」

「何じゃ、狼？」

「まさか、連中も——」

「いや、それはない。だが、似ている可能性はある。とにかく、連中が『神狩りの牙』  
の使い方を知っている可能性は充分に考えられる」

「使い方……嫌な言い方だぜ」

「事実じゃろう？」

「で、俺らはどうすればいい？」

「封印を解かせろ。その後、我らが『神狩りの牙』をいただく」

「……まるで悪役だな」

「いつから、我らが『正義の味方』になった？」

「ぐっ……」

「以上じゃ。なお、天使は殺しても殺さなくても、どっちでも構わん。行くぞ、カタナ」  
「どこへ？」

「ドウジンショップとかいうところじゃ。晴明がドウジンシとかいうものを所望でな」

「分かりました」

「ではさらばじゃ。健闘を祈る」

「帰るのかよ！ 助太刀とか、そういうことするつもり微塵もないわけ!?」

「何を言っている。囚われのお姫様を救うのは騎士の勤めじゃ。お前がやれ」

「さつき、つまらないとか言っていたじゃねえか！」

「めんどくさい。暇がないんじゃ。買い物しなきゃならんからの」

「つか、この時間じゃ、店やってねえよ！」

「そんなこと知るか。行くぞ」

言って、そのまま流奈とカタナは階段を下っていった。

「ああ。言い忘れておったが——」

流奈が一度だけ、狼を振り返る。

「貴様の『封印』を解除しておいた。好きに使うといい。もつとも、アレイを使わないで生き残れるとは思わんがな」

「・・・・・・」

去っていく二人を見やり、狼はげんなりと呟く。

「何しに來たんだよ、あいっら・・・・」



頬に当たるやや強い風を感じ、零那は眼を醒ました。

「ここは・・・・？」

どこかの屋上のようなのだ。

きらきらと、眼下に広がる地上の星のような夜景が美しい。

どうして、こんなところに立たされているんだろう？

答えは簡単。

両腕を妙なモノに架せられているからだ。

その妙なモノは、棘だらけの変わった十字架のようにも見えるし、牙の並ぶ巨大な化け物の口にも見える。

——それは、枷だった。

それに人を縛り付ける以外、存在意義は考えられない。

「まあ、だからこうやって縛り付けられているんだけど、さ・・・・」

しかし、何のため？

何かのプレイ？

S Mは趣味じゃないんだけどな・・・

「——目覚めた？」

友好的な笑みを浮かべながら、一人の少年が近付いてくる。

上から下まで純白の、憎たらしい天使の少年。

「・・・・手が疲れたから、この鎖、外してくれると助かるんだけど？」

「そりゃあ、無理だね。これから儀式に君を使うから」

言って、天使は笑った。

「儀式？」

「そう。ところで、君は降鬼戦争というものを知っているかな？」

「鬼が突然出てきて、地上を襲ったってアレ？」

零那は、狼から聞かされた話の中で辛うじて理解できた部分を言った。

「そうか・・・君はやはり知らないんだね・・・本当の降鬼戦争を——」

「本当の？」

「そう。本当の降鬼戦争さ・・・。君が知ってるのは真実ではない。鬼なんて、いやしなかったんだよ、本当は。それこそ、空想の産物さ。本当の鬼はね、どっかの馬鹿共が、異界なんて馬鹿げたモノを創った為に、歪んでしまった世界が生み出した半端者共さ」

「なっ——」

「嘘だと思ってるのかい？だが、事実だ。これが真実だ。その後、その事実を抹消するために、連中は真実を知っている者達を皆殺しにした。ふざけるだろ？ まったく。そして、再び歪み始めた世界を直すために、連中は異界から半端者共を狩る連中を派遣してる。馬鹿は死んでも治らないという典型的な事例だよ、これは。もっとも、連中は死なないけどね」

言って、天使はくつくと嗤う。

「・・・どうして、そんなことをアンタが知っているの？」

「僕が『古き血』の一人だからさ。香耶家の分家の一つ、芹屋の者だ」

「？」

「驚いたかい？ それぐらいで驚いては困るよ。こんなのベタネタじゃないか。なあ、

物語を切り刻み、神をも殺す『神狩りの牙』、結真 零那さん？」

「・・・儀式って、まさか再び世界を戻す——」

「違うよ」

きっぱりと、天使は言った。

「そんなつもりはない。まあ、十二使徒の連中にはそう言うてあるけどね。世界を再構築するって。僕にとってはどうでもいいことだ。まあ、君を使う儀式は、そうだな、小さな歯車を動かすって所かな・・・？」

「小さな・・・歯車？」

「狂った物語を変える、小さな歯車だよ」

にやり、と嗤う。

「さあ、始めようか。物語を変える、最初の歯車を始動させよう」

呟き、

天使は満面の笑みと共に、

ばさりと翼を鳴らした。

零那の周囲の半円型の魔法陣が光り輝く。

幾何学模様の上を紅い光りが、意志を持ったように走る。

「封印を解かせてもらうよ。君は、君として存在しては意味がない」

「なっ——何を——」

零那は、高濃度の魔力<sup>マナ</sup>を一心に浴び、呼吸さえも出来ない。言葉を唇に載せるのも至難の業だ。

「君は、人間じゃあ、ない」  
ぞくりとする、微笑。

「人形だ」

「——!!」

「いくら、人間の体をしていても、所詮は人間としての役割を持たない。笑おうが、泣こうが、怒ろうが、ただの器。ただの鍵。利用されるだけ利用され、あとは捨てられるだけの人形。それが、君だ」

詠うように、嘲るように、天使は言う。

「だからさ——」

天使は零那の耳元で囁く。

「人形は人形らしく、僕の役に立てよ」  
刹那。

零那の中で、何かが外れた——

10

「——やあ、遅かったね」

月光を浴び、白い翼を一对生やした天使が一人佇む。

『『神狩りの牙』の封印は解かれ、僕の目的は果たされた。十二使徒や選民たちは全滅したけれど、知った事じゃない。もはや、祭りの後だ。今更、どうこう出来る問題じゃないと思うけど?」

「どうでもいい」

黒衣の悪魔は片眼鏡を押し上げ、

「俺の目的はその、封印を解かれた『神狩りの牙』を奪うことだ」

奇妙なオブジェに架せられ、気を失った零那を指さした。

「へえ。随分と、随分な悪役ぶりだね」

「正義の味方って柄でもないんでね」

「……で、力づくか。でもさ、魔導師に半端<sup>ウイズダム・ウイザード</sup>者が勝てると思ってるの?」

「……」

「異界生まれの半端<sup>ウイズダム・ウイザード</sup>者。眼の能力しか使えない、忌み嫌われし悪鬼。どんなことしても、そんな奴が僕のような人間に勝てると思ってるわけ?」

「ああ。俺は自分の言ったことは守る主義なんですね。俺を『あの名』で呼んだ奴は全員悲惨な末路を辿ってるぜ」

「言ったことは守る主義？僕と同じ、嘔吐きのくせに？」

「そうだ。半端<sup>ウイズダム・ウィザード</sup>者の異端」

「……いつから、知っていた？」

「裏切り者に注意することだな。異界の協力者が、色々と有益な情報をくれたよ。お前が、『翼』だけを覚醒させた前代未聞の半端<sup>ウイズダム・ウィザード</sup>者だつてな」

「ああ。彼か。やっぱりね」

「自分の組織に裏切り者がいたというのに、随分と平然としているんだな」

「別に関係ないよ。それに、僕はそれを望んでいた」

「何だと——？」

「言ったとおりだよ。悪の組織には裏切り者がつきものだ。なきや、ないで寂しいだろ？」

「……イカれてやがる」

「狂ってるのはお互い様だ。それに、君だつて知ってるし、それを变えるために活動しているんだろ？ 物語って存在を——さ」

「そこまで知ってるなら、話は早いな。さつさと、零那をこちらに渡してもらおうか」  
狼は銃を構え、天使に言い放つ。

「出来るの？ 殺せない殺人鬼に、僕を止める事なんて」

「出来る。殺さなくとも、無力化することぐらいは容易いからな」

銃を、放つ。

銀の弾丸が、真っ直ぐに天使へと向かう。

「無理だつて」

ばさり、

天使の翼が唸る。

「いくら僕が異端でも、力は魔導師並。外部から吸収した魔力<sup>マナ</sup>が大気へと影響を与える力は、それはそれは凄いモノだよ」

瑪瑙<sup>めのう</sup>色の雷火が迸り、それが天使の周囲を囲む。

「結局、君に勝ち目はない。君は死に、僕は生きる。君も、本当はそれを望んでいるんじゃないのかい？」

「そんなことは——」

雷火の四散を避けながら、再び銃を放つ。

「俺が決めることだ。口出しすんじゃねえ!!」

「はっ！ 接近戦に持ち込んで叩き込もうって魂胆かい！」

素早くポケットから出したバタフライ・ナイフを展開させ、天使は叫ぶ。

「甘いんだよ、オッサン!!」

逆手にナイフを構え、狼を襲う。

「俺は、オッサンじゃねえ！ まだ二十二だ!!」

その一撃を難なくかわし、一定の距離を取る。

「それにな——」

素早く、右手に握っていた銃を左手に持ち替える。

右腕が、ぱっくりと真ん中で割け、ちょうど折りたたみナイフの刃が展開するように、中から巨大な刃物が現れる。

「――得物ってえのはこういうモノのことを言うんじゃないのかい？」

邪悪に、狼の口元が歪む。

「その腕、一体――」

「ちよっと前に殺人鬼と色々あつてな。腕、もぎ取られたんだよ。それで、新しい腕を技師に創ってもらったんだ。もつとも、俺はコブラみたいなのがよかったんだが、あのジジイ、飛び道具は好かねえとかぬかしやがつてよ」

「有り得ない！ そんなSFもどき――」

「あア？ 何を今更！ それに、これがいつSFじゃねえって事になったんだよ？」

「だっ、だが――」

「だが、もクソもあるか。伝奇だろうが、SFだろうが、ファンタジーだろうが、推理小説だろうが、何でもアリなんだよ、この物語は！」

叫び、狼は一気に天使へと肉薄する。

「さあ、遊ぼうぜ！！ 愉しまなきゃ、損だろう！ なあ！！」

ガキン、

天使の握るナイフが、紙でも裂くようにあつさりとぶつた切られる。

「さあ、王<sup>チェック・メイト</sup> 手だ。盤上にはもう駒はない。あとは王<sup>キング</sup>の勝敗で勝負が決まる！」

「駒がない？ ははは！ それは嘘だ！！」

嗤い、天使はちらりと一瞥する。

その目線の先には、奇妙なオブジェに架せられた零那の姿――

「まだ、君の盤上には彼女が残ってる！ 女王<sup>クイーン</sup>の駒がね！！」

「お前、何を――!?」

「道連れだよ。彼女は僕と供に死ぬエエエエ!!」

天使は嗤いながら、自分の周囲の雷火を零那へと放つ。

「やめ――」

『忘れないでね、狼――』

空中放電を繰り返しながら、まるで竜のように、雷火が零那を襲う。

『あなたはわたしが殺すんだから――』

「やめろオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

刹那。

魔狼の鎖が、断ち切られた。



「ほう、これは――」

にやり、と嗤う。

「面白い・・・・・・・・・・！」



大気が、僅かに輝く夜空の星明かりが、吸い込まれるように消えてゆく。

狼の瞳が、紅く染まり、

背中に、一對の蝙蝠の翼に似た皮膜状の翼が、現れる。

その瞳の紅さは血のように鮮やかで、

その翼の漆黒さは夜闇よりも深かった。

「・・・・・・・・・・」

雷火を握りしめ、狼はその紅き瞳で天使を見据える。

「それが・・・・・・・・君の、鬼子の本当の姿か・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

悪魔は何も答えない。

ただただ天使を見つめている。

「随分とカッコイイじゃないか。僕も迂闊にも惚れてしまいそうだよ」

「末梢えろ」

左手に握る銃に、金色の幾何学模様が浮かび上がる。

外部から、凄まじい速度で大量の魔力を吸収し、それを銃を通して放出する。

高濃度の魔力の塊が、天使の左腕を消滅させる。

血は出ない。

一瞬にして、原子レベルまで分解された為だ。

「はっ、はははは。これは凄い・・・・・・・・！」

自分の腕が消えてもなお、天使は笑みを崩さなかった。

それはまるで、人形か、機械仕掛けの絡繰り人形のように。

「これで、僕の目的は達せられる!!」

嗤いながら、天使は狂ったように天を仰ぐ。

「僕を殺せば、君は殺せない殺人鬼から、殺せる殺人鬼へと生まれ変わる!! 物語が、

変わる!! 動き出すんだ!! これから!! 僕は小さき歯車としての使命を全うするんだ!!

だから――」

「さっさと僕を殺せエエ!! 鬼子オオオオオ!!」

刹那。

天使の体が抹消した。

遺体すらも、残らない。

それはまるで、



最初から、いなかったかのよう――

完全なる死。

彼の存在した証は何も残ってはいない。  
がくり、

狼は膝をつく。

そこにいるのは、

人を殺せない殺人鬼でもなく、

人を殺せる殺人鬼でもなく、

ただの、ちっぽけな人間だった。

「これで・・・これで・・・」

狼は謔言うそことのように何度も呟く。

壊れたテープレコーダーのように、

何度も何度も、呟いた。

「戻っちまった――」

人を殺せる、殺人鬼に――

涙は出ない。

悲しいのに、

哀しいのに、

涙が出ない。

そうだ。

俺は、

もう、涙が涸れて泣けないんだ・・・

ぽつ、ぽつ、

雨が、降り始めた。

自分の代わりに、泣いてくれるかのように――

「なあ・・・」

狼は虚空を仰ぎ、呟く。

「何――」

ばさり、

翼が、鳴る。

悪魔の翼が、唸る。

「何、視てんだよオオオオオオオ!! お前エエエエエエエエエエエエ!!」

再び、銃に金色の幾何学模様が浮かび上がり、銃口から、高濃度の魔力<sup>マナ</sup>が放出された。  
『——!?』  
瞬間。

何か、夜空に人影のようなモノが見えたが、何事もなかったかのように、再び元の夜闇に姿を戻した。

しとしと、

しとしと、

降り続く、雨。

「ねえ、狼・・・」

「目、覚めたのか・・・零那」

「そりゃあ、あそこまで大声で怒鳴ってりゃ、嫌でもね」

「そうか——」

「そうだよ」

「——俺は化け物だ」

「そんなの、わたしだって、同じじゃない？」

「お前は、まだ引き返せる。俺はもう——」

「引き返せない？」

零那の問いに、狼はこくりと頷いた。

「だったら、引き返さなければいい」

「えっ——？」

「償えない罪は、償える形で償えばいい」

「お前——」

「前に言っただでしょ？あなたの罪、わたしが一緒に背負うって」

「そういえば、言ってたな・・・」

「一緒に、背負っていいこうよ。罪も、何もかも。ね？」

「ああ」

そうだ。俺はまだ、人間だ。

零那だって、

そう、

自分だって、

心まで、化け物には、なって、いない——

——そう思うと、

何となく、

雨が、温かく感じた——

1  
1

——一週間後。

「一応、神隠し事件は迷宮入りだな。お前の倒したガキ共も、その頃の記憶を失ってるみたいだし。そのうち噂も消えるだろ。あと、オリンピックの話もあるしな」

テレビを見ながら、ぼんやりと亮は呟いた。  
時刻は昼時。

ブラウン管にはワイドショーが映り、神隠し事件のことが報道されていた。

「ところでさ——」

「ん？ 何だ、狼」

「何で、お前がここで寛いでテレビ見てんだよ？」

「休憩だよ。きゅーけい。お前だって、今回のことでたんまり稼いだんだ。文句ねえだろ？ 細かいことに気にすんな」

「それとこれとは関係ねえよ。まあ、おかげさまで俺の新しい革ジャン買ったけどな」  
「だったらいいじゃねえか」

「そうか？」

狼はジト目で亮を見やり、軽く嘆息する。

「その二人、お昼ご飯食べる？」

台所からひよつこりと零那が顔を出す。

「はいはーい！ 零那ちゃんの手料理なら何でも食べまーす！」

「バツカ！ てめえ、なんて自殺行為を！」

はしやぐ亮を慌てて狼が押さえ込む。

「何だよ？」

「あいつは、ものすごく料理が下手なんだ……。それを食すとは……。死ぬぞ？」

「何を言う！ それがまたいいんじゃないか！ こう、「ごめんなさい。わたしい、料理ヘタでえ……。」「って半べそ掻きながら焦げた料理を持つてくる。まさに萌えだな！」

亮は握り拳を作り、なにやらイタいことを力説する。

「とにかく、俺は知らねえからな。全部食えよ？」

その時、奥の台所から零那の「できたよ」と言う声が聞こえてくる。

亮は期待の眼差しで、

狼はげんなりした表情で、

その声を聞いた。

「はい、おまたせ」

零那の持ってきた皿に盛られた料理を見て、さすがの亮も顔が引きつった。

焦げたとか、そういう次元のモノではない。

正直、それがどのような料理かも判別出来なかった。

「だから言ったんだよ……。」「

狼は頭を押さえながら呟いた。

「ゴメン、今度ばかりは俺が悪かった……。」「

亮は泣きながら狼に謝った。

「全部食えよな？」

「いや……。ボクはちよと胃腸の調子が……。」「

「うそつくなっ☆」

「あっはは！ やっぱバレたかつ☆」

「うふふふ」

「あははは」

「ねえ、食べないの？」

「あはははは」

「うふふふふ」

「ねえってば！」

「あはははは」

「うふふふふ」

「ねえ——」

『逃げろっ~~~~~~~~!!』

「待てエエエエエエエ!!」

まさに、脱兎のごとくとはこのことか。

狼と亮は光りよりも速く、一気に魔術師の巣から逃げ出した。

「わっわわ！ 何だ？ 何をやっているんだお前達は・・・？」

突然、狼にタックルをかまされ、階段を上がってきたカタナは少しよろけた。

「おっ、カタナ。何しに来たんだ？」

「何を言っている？ お前が地上のらーめんとやらをおごってくれると言ったから、わ

ざわざ来たんだぞ？」

「あく悪い・・・その件ならまた今度な。今取り込み中でさ・・・」

狼はちらりと、狂戦士化し、どこから持ってきたのかチェーンソーを握りしめ、「死ね」

と静かに言う零那の姿を見た。

零那はギラついた目と狂気に満ちた笑みで嗤う。

「・・・狼、安心して成仏してくれ」

その光景を見て全てを察したのか、カタナは静かに合掌した。

「この薄情者っ・・・！」

狼は涙目でカタナを見やるが、本人は関わり合いになりたくないらしく目をそらす。

「バカ！ 狼！ 速く逃げないと殺られるぞ！」

そんな狼を強引に引っ張り全速力で亮は逃げ出す。

そんな馬鹿共を照らすように、太陽がギラつく。

今日もまた、憎たらしいほど暑い日になりそうだ——

「五、何処にも無い場所／了」